

---

# 白雪娘

空網 ハリ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

白雪娘

### 【Nコード】

N6186Y

### 【作者名】

空網 ハリ

### 【あらすじ】

300の国がひしめき合っている時代のドイツのとある国に、一人の男と少女が住んでおりました。童話をモチーフにした事件に、無表情コンビが挑むミステリー。

1章ごとの完結となっております。最近1章完結しました。

昔々、ドイツがおよそ300の君主国がひしめき合っている時代、小さな公国に一人の男と、娘が住んでおりました。

.....

「シユネ、いる？」

その日、いつものように掃除と洗濯、夕食の下ごしらえまで済ませようやく人心地ついたシユネは、小さく肩をすくめた。

勢いよく入ってきた少女、ネルケはノックもせずに入ってきたと思えば、シユネの手にある物に視線を向けた。

友人の視線に、シユネは何も言わずに立ち上がる。客人のために新たにお茶を淹れる必要があるからだ。ネルケがしょっちゅうここに来る理由の一つが、シユネの淹れた薬草茶クローターティーなのだ。

立ち昇るカモミールの香りに一瞬相好を崩したものの、ネルケは「聞いてよ！」と身を乗り出した。

シユネは彼女に知られないよう、こつそりとため息をついた。

ネルケの「聞いてよ！」は、今から長い話が始まる合図である。

そしてそれに対する拒否権はシユネには許されていない。

(今日の午後は読めると思ったのに)

まくし立てるネルケの話に適当に相槌を打ちながら、シユネは未練がましく昨日借りたばかりの医学書をに想いを馳せた。

それは、彼女の保護者、この家の主でもあるヴィルフリートが、その雇い主から借りたものである。

「シユネ、聞いている？」

剣呑な光を帯び始めたネルケの瞳に、シユネは慌てて頷いてみせた。これ以上考え事をしていたら、ネルケの機嫌を著しく損ねてし

まう。

.....

本当にこの子は変わっている。

穏やかに相槌を打つシユネを見ながら、ネルケはこっそり心の中で呟いた。

自分よりも幼い13歳の小娘が、なぜこのように落ち着いた空気を醸し出せるのか、ネルケは常々不思議に思っている。その佇まいは一体どこから出てくるのだと、普段落ち着きがないと母親からお言を食らうネルケとしては思わずにはいられない。

物静かで、それでいてどこか張り詰めたような緊張感さえ漂う様相を、彼女の漆黒の髪と、白い肌が一層際立たせている。そして、その顔。

通った鼻梁に、長い睫毛に縁取られた大きな黒い瞳、そして透き通るような白い肌。

あと2、3年したら、町一番の器量よしと呼ばれる自分をも軽く凌ぐだろうと、ネルケは公平な目で見ながら思った。今だって、飾り気の欠片もない簡素な服を着ていなければ、髪を無造作に垂らしていなければ、どこぞのお姫様と見まごう姿である。いや、みすばらしい恰好をしていても、漂う気品は、やはりただの町娘が持つには、些か不自然なように感じられた。

彼女の保護者（遠い親戚だと彼らは言うが、恐らく血の繋がりはないと、ネルケは密かに踏んでいる）ヴィルフリートが半年前、たった13歳の少女の手を引いて戻ってきた時は、一体何の冗談かと思っただけだ。

「それにしても、外套は残念でしたね。せつかく似合っていたのに」

突然の言葉に、ネルケは一瞬何の話をされたのかわからなかった

が、すぐに思い至った。

そもそも、自分が今日この家に来たのは、その件についてだったのだ。

「そうなのよ！ヘンゼルの奴、本当に憎たらしい！」

再び沸き起こった怒りに思わず立ち上がれば、ネルケの、綺麗に編まれた栗色の髪の手先がわずかに揺れた。ヘンゼルとは、同じ町に住む少年の名である。

「いいこと、シュネ。絶対にヘンゼルに近寄っては駄目。あいつ、段々と手に負えなくなってきた。」

ネルケの心配は目の前にいる少女にある。目立つことを好まないシュネは、外に出る時は顔を覆うフードを被っているため町の間人のほとんどがその美しい素顔を知らないが、うっかり見られようものなら大事だ。確かに、彼女の保護者がヴィルフリートである以上、おおっぴらに手出しはされないだろうが、それでもわざわざ狼の群れに羊の姿を見せるべきではない。

「ヘンゼルは厄介よ。あいつ、裏では酷いことをするくせに、大人の前では真面目ない子を演じるから始末に負えないのよ。念のため、妹のグレーテルにも近づかないようにね」

グレーテルはヘンゼルの妹で、シュネよりも年下だ。一人ならただの頭の足りない子供だが、兄の後ろを、いつも付いて回っている。そして、そんなグレーテルを、ヘンゼルはこのほか可愛がっているのだ。

ネルケは力説するが、シュネはもともと、自分から町の誰かに必要以上に話しかけたりしない。地味な格好と顔を覆うフードが不気味に映るのか、町の人間も、シュネに話しかけようとはしない。ただし、対応が丁寧なのは、ひとえに町の警吏隊の隊長を務めるヴィルフリートの存在ゆえだろう。

鉄面皮と呼ばれる彼の姿を思い浮かべ、ネルケはちらりとシュネを見やる。

ヴィルフリート・クレールは町で一番の剣士だ。寡黙だが、任務

には忠実であり、誰に対する態度も丁寧で礼儀正しい。これでもう少し愛想があれば、それなりに町の娘たちに人気があっただろう。

実際、彼はよくよく見れば割と端正な顔立ちをしていたが、大きく屈強な体と鋭い目つき、それに何が起きても眉一つ動かない、血の通った人間か疑わしくなるあの姿が、人々を遠ざけるのだ。

無表情のままカモミール茶を飲んでいるシュネを見ながら、ネルケは思わずにはいられなかった。この不愛想な少女と、あの鉄面皮は一緒に暮らしているのだ。二人きりの時は、一体どんな会話があるというのだろうか。

.....

「ヘンゼルか」

「ええ。泥を投げ付けられたため、ネルケの外套は汚れてしまっ  
たって」

シュネの作ったスープを一口飲んだところで、ヴィルフリートの  
手が止まった。

（あ、おいしいんだな）

特に表情に変化はなかったが、ヴィルフリートが感心しているこ  
とは、何となく伝わった。それがわかるまで、結構な時間が必要だ  
った。この人はきつと、表情筋を生まれる時に母親の胎内のどこか  
に忘れてしまったのだろう。自分も人のことは言えないが。

「あの少年についてはあまり聞かないな」

「ネルケの話では、大人の前では態度が違うそうです」  
「なるほど」

納得したようにヴィルフリートは頷いた。思い当たることはあつ  
た。彼は自分の感情を出すことは不得手だが、他人の感情の機微に  
疎いわけではけしてない。

ヘンゼルは確か今年で15歳。表と裏の顔を使い分ける器用さは、

長所にも短所にもなりうる。ましてやそれが、力つけたものの、まだまだ思慮の足りない少年であれば。

「おかげで今日は本を読めずじまいでした。せつかく、宰相様からお借りした本だったのに」

「次に俺がハインリヒ様の元に伺うのはまだ先だ。急ぐことはない」

ヴィルフリートの身分は、一介の警吏隊長である。だが、それはもう一つ、彼には役職があった。

警吏の仕事をこなす一方、彼はこの国、ランドシュテール公国の宰相を務めるグリューン家にも仕える身であった。と言っても、彼が宰相ハインリヒのために働いている姿を、シュネはあまり見たことがない。ただ、定期的に屋敷に赴き、何かしらの報告はしているようだ。その辺りのことを、彼はシュネにあまり語りたがらない。

この町に来た時一度だけ、彼に連れられ宰相の館に行ったことがある。その時、一言二言話しただけで、ハインリヒはシュネのことをいたく気に入ったらしく、シュネに館の図書室への出入りを許してくれたのだ。

その後も、ヴィルフリートを介して本を貸してくれることがある。ヴィルフリート自身はそのことを快く思っていないらしく、それ以降シュネが館に行くことはなかった。

「どうぞ」

食事をあらかた終えたところで、ヴィルフリートの前にシュネがカップを差し出した。中には、カモミール茶が湯気を立てている。

林檎に似た香りが優しく立ち昇る。宰相の館で緑茶を口にしたこととはある。この時代のお茶と言えば、紅茶より緑茶の方が主流だった。しかし、ヴィルフリートはそれよりも遙かに、この少女が淹れてくれたの方が彼の好みだった。

カモミールを摘み、花を乾燥させて煮出しているのだろうか、気にかかることが一つある。

「あまり、薬草の知識は人に見せるなよ」

心得ているのか、シユネは頷き、理由を尋ねることをしなかった。魔女狩りは昔ほど無体なものではなくなったが、薬草の知識があるだけでも、魔女呼ばわりする人間がいけないわけではない。ことに、常日頃からフードを目深に被り、人付き合いをしない娘であれば、特に。

最近魔女という単語をあまり耳にしないのは、一つはこの国の公爵の方針によるものだ。魔女狩りという行為がどうこうというより、現実主義者である彼は、ろくな証拠もなく曖昧な言葉だけで全てを片付けるあのやり方が気に入らないのだ。それは、あの宰相の影響が強いのだろう。

そして、もう一つの理由は戦のせいである。ドイツの至る所で起こり、休み、また繰り返し返すこの長い戦のせいで、人々はそんな曖昧なものに目を向ける暇などないのである。幸いこの辺りは比較的平和ではあるが、近くのマグデブルクが10年ほど前、傭兵たちの略奪によって大きな打撃を受けたことは、まだ人々の記憶に新しい。

「大丈夫です。私がこの町でお茶を淹れるのは、ヴィルとネルケだけです。ネルケは、私が薬草の知識を持つことを知りません」  
しかし、シユネの言葉は、翌日覆されることになる。

## 1 (後書き)

ランドシュテューヘンは架空の国です。

その日、シユネはマーシヨラムを摘みに少しだけ遠出をしていた。町はずれにある、森の入口である。

フードを目深にかぶり、保護者のヴィルフリートに言われたように、町の外にはけして出ない。

こんな時、一度だけ行ったことのある宰相の館の中庭をつい思い出す。

あの中庭は見事だった。ヴィルフリートに連れられたシユネは、主に報告をしに行くヴィルフリートに言われ、この中庭で一人花々を眺めていた。季節に応じた色とりどりの花は、奥方の好みなのか「見事ですね」

最初に見た時、シユネは思わず眩き、庭師と思しき男がその声に顔を上げた。

「そつだろつ、嬢ちゃんはこの花が好きか？よければ少し分けてやるつ」

「お気持ちはありがたいのですが、私にはもつたいなさすぎます」シユネの正直な感想を、謙遜と受け取ったのか、男は笑みを浮かべながら首を振った。よく見ると、まだ若い。帽子を被っているために顔はよく見えないが、ヴィルフリートと同じくらい、せいぜい30前後というところだろう。

(おや)

シユネはこの時初めて、まじまじと庭師の顔を見た。

「どうかしたかね？嬢ちゃん」

彼の顔も、そして次に視線を移したその腕も、シャツからのぞく

肌も、庭師の物ではない。毎日炎天下で働く者の物ではない白さだった。そして、粗野な言葉遣いではあったが、彼の紡ぐ言葉は訛りがなく、耳に心地いい。その仕草も、物腰も、どこか気品がある。訝しげな自分をどこか面白そうに見つめる男に、ふと保護者の男の言葉が甦った。

「ハインリヒ様は、時々思いがけないことをされるから」

「・・・ハインリヒ様？」

それは、確信ではなく、ただ思わず出た言葉だったが、目の前の彼はその緑の目を丸くし、「ほう」と感嘆したように声を出した。

「こんなに早く見破られたのは初めてだ。お前がヴィルフリートが拾ったという子供か。名前は何という、年はいくつだ、何ができる」

高圧的な言い方ではなかったが、若い娘に無遠慮に尋ね、それに対する回答が得られることを至極当然の物と信じて疑わない姿勢は、いかにも貴族特有の尊大さだと、シユネはこっそり思った。

「・・・シユネです。年は13になったばかりです。・・・出来ることなど、特に何も」

薬草の知識がいくつかがあるが、それは母親から教えられていたもの程度にすぎない。一国の宰相のために何かしてやれるような大層なものではないので、シユネはそれだけ言った。

「シユネか」

そつけないシユネの返事に、面白そうに目を細めながら、ハインリヒは再び庭の花に目をやった。

「先程の答えはまだ聞いていなかったな。シユネはどの花が好きだ」

「・・・その中では、マリーゴールドでしょうか」

足元に咲く小さな花に目をやり、ハインリヒはもう一度「ほう」と、今度は面白そうに呟いた。

「マグノリアでも百合でもダリアでも、大輪のバラでもなく、地べたに咲く、この小さな花が」

確かに、中庭にある花は華やかなものが多かった。種類豊富なバラを中心、色とりどりの花が咲いている。彼が疑問に思うのも、無理はないかもしれない。

「理由を訊いても？」

「・・・花弁を、干してお茶にします」

「・・・うまいか？」

「くせがなくさっぱりとしてます」

ふむ、と頷いたハインリヒは、その後、なぜかシユネを気に入り、図書館への出入りを許したり、来た時は自分の子供たちの遊び相手にとまで言い出したのだ。

ただ、そのことを知ったヴィルフリートは、シユネをなかなか館に連れて行くことはしなかったため、それ以降シユネがあ館に出入りすることはまだない。

.....

人がいる。しかも、見覚えのない。

帰り道、帰路につこうとするシユネは立ち止まり、目の前でせわしなく動く黒い外套をまじまじと見つめた。

その外套を身につけている人物は、やはりシユネの知らない顔であった。しかし彼女がさして警戒をしなかったのは、その相手が女だったからだ。しかも、どうやら歩くのが不自由らしい。杖を持っている様子がないので、今くじいてしまったのだろう。

「大丈夫ですか」

そつと声をかけると、相手は驚いたように一瞬身動きし、恐る恐るといった風に振り向き、シユネの瞳を見て、微かに落胆した表情を見せた。

(誰か探していたのだろうか)

女の様子に首を傾げつつも、シユネは彼女に近寄った。こういう時、ネルケのように人懐こい笑みが浮かべられたらいいのだけれどと、詮無いことを考えながら。

ハンナと名乗った女は、シユネの差し出したマジヨラムのお茶を、礼を言いながら受け取った。年の頃は40代後半といったところかだが、ダークブラウンの髪はしっかりと手入れされているのか艶があり、髪と同じ色の瞳を縁取る睫毛は長い。さつきは気付かなかつたが、こうしてみると、庶民にはない気品と美しさがあつた。

彼女の外套は色こそ地味だが、良い素材を使っていることは、シユネの目に見ても明らかだ。留め金の部分は金縁に囲まれたルビーで、傷一つない。仕草もどこか洗練されているし、彼女はどこかの貴族か、富豪の奥方なのかもしれない。

「もうすぐ、家の者が帰ってきますので。その時は、お送りします」  
ヴィルフリートはあれでなかなか人がいい。自分や自分に属するもの、この場合はシユネや町民、彼の主人であるハインリヒに危害を加える者には一切の容赦がないが、無力な者には基本的に親切だ。悲しいことに、その事実を知っている者は少ないのだが。

「おいしい」

一口含み、ハンナは相好を崩した。それは、シユネが初めて見た彼女の笑顔だった。その後、ヴィルフリートが帰るまでの間、とりとめもない話をする。どうやら彼女は、これでなかなか話し好きなようだ。

ハンナはこの町の住民ではない。だが、町の端にある森の小屋で寝泊まりしていると云う。

「最近来たばかりだけど、少ししたら戻るつもりなの。あの小屋は、私が子供時代住んでいた家」

「昔の？」

「20年ほど前結婚する時に、他の国に」

そう言った彼女は、なぜか何かに耐えるように、きゅつと口をすぼめた。

「なるほど、里帰りですか」

シユネが思わず言うのと、彼女は寂しげに首を振った。

「いいえ。私は里帰りなんかできる立場じゃないの。だって、20年前私は夫と幼い娘を捨てて他の男の元へ行ったのだから」

ハンナの話は、それほど難しくはなかった。

20年前、彼女は貧しいながらも夫と娘とこの町で平穩に暮らしていた。そんなある日、ハンナはこの町にたまたま通りがかった貴族の目に止まり、互いに恋に落ち、迷った挙句彼について行ったらしい。

その貴族は妻がいたが、ハンナに小さい屋敷を買い与え、足繁く通っていた。やがて彼女は子を生み、何不自由なく幸せな生活を手に入れた。

男の妻に子はなく、また、彼はハンナを得た後は愛人を作ろうとしなかつたため、彼女が生んだ男児が嫡男となった。その後も幸福な日々は続いた。

その後、最近になって彼が病気でこの世を去り、息子がしっかりと跡を継いだそんな時、ふとかつて自分が捨てた夫と娘が気になつたらしい。

名乗り出る気はなかった。そもそも、行く気もなかった。行つたところで自分には何も言う権利も資格もない。だが、彼女の前の夫はあの後すぐに亡くなり、娘は若くして町の男の元へ嫁ぎ、今は貧困に喘いでいると知り、何か自分にできることがあればと、この町まで来てしまったのだ。

彼女がしばらくの宿にしている小屋は、彼女が幼いころ、まだ結

婚する前に住んでいた小屋だ。

「娘さんとは？」

シユネが尋ねると、ハンナは力なく首を振った。

「まだ会ってないわ。会う勇気がなかなか出なくて……。もうじき迎えが来るから急がなくてはいけなのだけれど」

「迎えますか」

考えたら、彼女のような立場の人間が、一人でこんな所まで来るのは、本来ならあり得ない。

その時、玄関から音が聞こえてきた。ヴィルフリートが帰ってきたのだ。

.....

「俺は、以前あまり人に薬草の知識を見せないように言ったはずだがな」

ハンナを送り届けた後、帰ってきたヴィルフリートはわずかに批難するように呟いた。

「いけませんでしたか」

シユネとて、彼が言ったことは覚えていた。だが、足をくじき体が冷えてしまったあの老女を前にしてつい忘れてしまったのだ。

「いや、悪くはないが」

ヴィルフリートとて、シユネの小さな親切に目くじらを立てる気はない。ただ、どう言っているのかわからないだけだ。普段剣を振ってばかりいると、こういう時気の利いた言葉が出てこないから困る。

「ハンナさん、娘さんと会うことができるでしょうか」

20年前のハンナの行動をどう思うかと問われれば、やはり無責

任だと思っし、その彼女が今更娘のために何かする権利などないが、それでも、親としての情は彼女をこの町へ呼んだのだ。

貧困に苦しんでいる娘とやらが、母親の差し出した手をとればいいのだがと、シユネは他人事ながら思うのだった。

身元の分からない女の焼死体が発見されたのは、その次の日のことだった。

発見されたのは、町はずれの森の入口にある、小さな小屋だった。

その日、ヴィルフリートは朝一番に町はずれの小屋から女の焼死体が発見されたとの報告を受けた。

厄介な事件はいつだって自分たちの部署である一番隊に回ってくる。

そういう部署なのだから仕方がないと言えばそれまでだが、戦慣れしていない自分たちには、この光景はいささか厳しいものがある。副隊長のレオはそう思った。

隊長ヴィルフリートの補佐を務める彼は、ちらりと上司の顔を見上げた。眉一つ動かさず目の前の凄惨な光景を観察する彼は、やはりまともな神経の持ち主とは到底思えなかった。

新入りのヨハンなど、部屋に入った瞬間顔を背けたというのに。無理もない、彼はまだ15になったばかりだ。

レオは酸鼻を極めるこの現場で、一人、臆面もなく遺体に近づく上司に尊敬と畏怖が混じった複雑な視線を向けた。他の同僚も、皆似たように上司の背中を見つめている。

しかし、考えてみれば自分たちが平和に慣れているからでもあるのだ。戦や小競り合いが頻繁に起こる時代ではあったが、このランドシュテーヘンは、その中でも比較的平穏な日常が続いていた。

領主と、その右腕を務める宰相の手腕で、治安維持はかなり徹底されている。自分たちの組織がこうも秩序を守っているのも、宰相であるハインリヒからの多額の援助があるからだ。

「何かありましたか？」

熱心に焼けただれた遺体を眺める上司に、レオはうんざり気味に声をかけた。真っ黒に焦げ、性別も年齢も服装も、この人物を示す

ものが何もわからない焼死体をまじまじと見ても、何かがわかることは到底思えなかったからだ。

その小屋には、小さな竈があった。目の前にある黒こげは、昨日この竈を使おうとしたらしい。

「竈を使おうとして足を滑らせ、鉄の扉が閉まった・・・じゃないですかね」

できるだけ穏便な方向であって欲しいせいか、ヨハンがおずおずと口に出した。

「違うな」

そんな彼のささやかな希望をあっさり打ち砕いたのは、やはり上司だった。

「門がかけられていたそうさだ」

「な、何のために・・・」

思わずヨハンが呟く。この竈はパンを焼くためのものはずだ。人を焼く用途で使う物ではない。

「見てみる、扉の内側に傷がある。それも、この死体の目の前だけに、やけにたくさん。こっちの傷に比べて、どう見ても新しい。相当引っ掻いたんだろうな。つまり、この遺体は生きながら、火をおこした竈に閉じ込められたということだ」

そんなこと、淡々と語らないでくれ。

レオは思わず胸の内を呟いた。そして再び目の前の焼死体に顔を向ける。焼かれて死ぬのは苦しいだろう。彼は、昔一度だけ火あぶりを見たことがある。泣き叫びながら焼かれたのは、夫を亡くしたばかりの憐れな女だった。痛々しい悲鳴を上げながら炎に包まれた彼女が魔女だとは、彼には今でも思えない。

あれ以来、この地では魔女裁判はなかったと思う。疑いをかけられた者はいても、無罪放免だった気がする。この時代、魔女狩り自体がすでに衰退の傾向にあったのと、ランドシュテーヘンの領主が、魔女狩り自体に懐疑的だったからだ。

火あぶりは、苦痛の時間が長い。彼の上司は、内側にいくつもひ

つかき傷があると言った。

「・・・苦しかったでしょうね、彼女」

「待て」

思わず呟いた同情の言葉を遮るように、ヴィルフリートは手を上げた。

「はい？」

「なぜ、今『彼女』と言った？」

「え？だって・・・」

「そういえば、俺も女と思ってました」

「なぜ？」

ヨハンの言葉に、その隣にいた隊員もそうだと頷く。

「それは・・・ヤークブじいさんが『女の死体がある』って。あ、ヤークブってこの小屋の管理人なんですけどね」

その言葉に、ヴィルフリートは嘆息した。

「・・・やはりな」

「隊長？」

「・・・昨夜、俺はこの人に会っている、と思う。たぶん」

そう言った上司に、その場にいた全員が顔を向けた。目だけは合わせようとはせず。

「・・・俺はやっていないぞ？」

まさか、自分がそんな台詞を口にする事になるとは思わなかった。

.....

月の出ていない夜だった。

肌寒いこの季節は日が暮れるのも早い。ヴィルフリートはランタンにある蠟燭の長さを確認しつつ、何度か後ろのハンナを見やった。こども暗いと、簡単にはぐれてしまっただろう。だが、彼女はしっかりと彼について来ていた。

彼女の足の具合は、時間が経つにつれだいぶましになっていたらしい。

シユネが作った軟膏を塗った湿布の威力を、誰よりも知っているのはヴィルフリートである。

「そういえば、今使われている小屋は20年も使っていないと聞いたが」

今夜は冷える。ましてや新月の夜だ。火を確保していないと死活問題である。

「大丈夫です。ヤーコブさん。あの小屋の管理をされている方が、定期的に見てくれていたそうです。あの小屋、たまに旅人に貸していたりしていたそうです。私も旅人として借りましたから。それで得たけななしの宿賃の一部は娘のもとへ行っているそうです。・・・雀の涙ほどですけど」

そう言つてハンナは立ち止まり、ヴィルフリートに向けて微笑んだ。柔らかい笑みだったが、有無を言わせぬ圧力を感じさせるものだった。

「お見送り、ここまで結構です。ありがとうございました」

警戒されているのかもしれない。ハンナは40代らしいが、手入れがされているのか、街の同年代の女性より若く見える。まだまだ十分美しい彼女からすれば、ヴィルフリートのような屈強な男は警戒すべき対象なのかもしれない。

だからヴィルフリートも黙って頷き、そのまま軽く頭を下げ、踵を返した。

「シユネさんにもよろしく」

歩きだすヴィルフリートの背中に、おっとりとした声がかげられた。それに対する返事として片手を軽く拳げ、彼は振り返ることを

しなかった。

「・・・以上だ」

「まあ、誰も隊長を疑ったりはしませんけどね」

レオが笑った。それにしてもこの上司は、あの状況でも表情一つ変えない。もし、自分があんな立場になれば多少なりとも動揺しただろう。なにしろ、殺人犯と疑われるかもしれないのだ。

「何にしる物盗りの犯行だと思いますよ。さつきから探しています  
が、金品の類が何一つない。まあ、もともとそうあったようにも見  
えませんが、旅人なら路銀くらいは多少あるはずですしね」

小屋の内部を調べていたヨハンが戻ってきた。家中の壺や樽をひ  
っくり返しても、何一つ出てこない。もともと飾り気のない簡素な  
小屋だったが、生活の匂いが何一つないのは、物品も食料もないか  
らだ。

「パン一つないですよ。水甕だけは無事でしたが」

「・・・この辺りは水が豊富だからな」

ランドシュテーヘンの近隣を流れるザーレ川はヨーロッパでも有  
数の国際河川であるエルベ川の支流だ。

「しかしまずいな」

ヴィルフリートは、寂しげな室内を見渡し呟いた。

「彼女は市井の出とはいえ名のある貴族の嫡女の母親。このままう  
やむやにはできないだろう」

彼女の話では、近いうちに迎えが来るはずだ。何としても、この  
悲劇を起こした犯人を捕まえ、差し出さなくては、厄介なことにな  
りそうだ。

.....

その日、シユネはフードを目深に被り、市場に出ている。

街の住人はよそ者であるシユネにあまりいい顔はしていないが、それでも彼女は警吏隊長であるヴィルフリートが後見している少女である。街で起こるいざこざを解決する彼の不興を買うのは得策ではない。そのため、彼らは表面上はシユネに対して丁寧だった。

「あら、シユネ」

シユネに気付いたのはネルケだった。いつもの外套ではなく、地味で色あせたマントを着こんでいる。

「この前ヘンゼルに外套をやられたでしょう。仕方がないから母さんのお古を借りてるのよ」

忌々しそうに言いながら、ネルケは栗色の髪を払った。その手には、バスケットが提げられている。

「ワインとケーキ？」

この場合のケーキとは、どちらかというクッキーに近い、レーブクーヘンと呼ばれる焼き菓子だ。

「おばあさんのところにお見舞い。どうも今具合が良くないらしいのよね」

「それなら、そのうち私もお見舞いにケーキを焼きましようか」

ネルケはにつこりと笑った。シユネの焼いたケーキは格別だ。材料は簡素だが、香辛料やハーブが上手く配合されていて、お気に入りなのだ。

「そうね。その時はよろしく・・・あ」

笑顔だったネルケがある一点を見つけた瞬間顔を曇らせたので、シユネは何事かと彼女の視線をそのまま追った。そこにいたのは、母親に連れられ歩いている少年と少女の姿だった。

「ヘンゼルとグレーテル？」

「あいつよ、あいつがあたしの外套を駄目にしたんだから」

ヘンゼルはシュネより少し年下の少年であり、名前くらいは知っている。直接話したことはないけれど。大人しく、親にも従順な少年だったと記憶している。また、いつも彼について回る妹のグレーテルの面倒をよく見ていた。

妹への態度に優しい少年だと思われがちだが、一度見た彼の瞳には感情めいたものが何もなく、わずかに暗い翳りだけがあつたのを、シュネは覚えている。

ネルケが外套を駄目にされたというのも、真実なのだろう。

「それにしても市場に来るなんて、あの貧乏一家が珍しいわね」

良く言えば正直、悪く言えば無神経なネルケの発言が、彼にそうさせる引き金になったのだと思うが。

おそらく、彼は無意味に攻撃することはしない。

ネルケは村一番の美少女として人気がある。そんな彼女の機嫌を損ねるのは、この村で暮らすにはあまり得策ではない。

ヘンゼルはメリットもないのにリスクを冒すタイプではないと思う。ネルケにしたのは、今後余計なことを言わせないための牽制なのだろう。

その時、シュネの黒い瞳が大きく見開かれた。

「シュネ？」

「……すみません。急ぐので私はこれで」

それだけ言うと、シュネはくるりと背を向け、風のように駆けだした。普段家に閉じこもってばかりの内向的な姿からは想像もつかないほどその動きは軽やかで、実に機敏だった。

「シュネ!？」

走り出したシュネは、ネルケの慌てる声をもう聞いてはいなかった。

.....

.....

「うう……。まだ気持ち悪い……」

今日嗅いだあの嫌な匂いは、未だ記憶に残っている。ひよつとしたら、髪や服についているのかもしれない。

ハンスは本日3度の洗顔を終えた後、くんくんと自分の衣服に鼻を寄せた。

本当に、今日の出来事は衝撃だった。焼いた肉の匂いは好きだが、それは羊や鶏に限る。

同僚はそんな彼を笑ったが、彼はまだ15歳なのだ。

貧しい農家の、しかも三男坊として生まれた彼は、13になる頃には家を出て、自分で食いぶちを探すしかなかった。

ハンスのような境遇の人間は少なくない。家もなく職を探す彼らにとって、一番効率がよいのは傭兵となることだが、貧相なハンスは誰が見ても見劣りした。もともと争い事には向いていないと、誰よりも彼は自覚している。とはいえ野良仕事以外できるものがない。

そんな時、父の知り合いが警吏隊に知り合いという伝手を持っていたために、紹介してもらったのだ。その相手こそ、あの凄惨な現場でも眉一つ動かさない鉄の男ヴィルフリートだった。

「あの人はいい人だよ。ちっと不愛想なところはあるが」

紹介してくれた男はそう言った。確かにそれは認めよう。おまけに、人の才覚を見抜く勘も持ち合わせていた。

彼は紹介されたハンスが争い事には不向きだと瞬時に見抜いた。鍛えれば多少は実力もつくし、実際日々の鍛錬は確実に彼を強くした。だが、彼はこの仕事に本質的に向いていない。なぜなら、もとも優しい彼は、こういつた血生臭いことが苦手なのだ。

「問題ない。何も、荒事ばかりじゃないからな、この仕事は」

警吏の仕事は意外と多様なのだ。報告書の作成は毎回しなくてはいけないし、組合内での揉め事ツシフトの調停から、護衛もある。商人の中

には税を誤魔化す者もいる。それらを見抜き取り立てることだつてある。

ヴィルフリートはハンスにさまざまな教育を施すよう指示した。字の書き取りや簡単な計算、そして商業の仕組みまでも。そっちは性に合っているのか、彼は何でもすぐに覚えた。ひよつとしたら、自分は商人の方が向いているのではないかと思つたくらいである。

今はまだ見習いとしてこうやって現場にもついて行ったりするが、そのうち書類仕事を回されるだろう。それでも、日々の鍛錬は強制されているが。

この後の地獄のしごきを思い身震いした時、目の前に暗い色の外套を羽織り、フードを目深に被つた小さな姿が目に入った。

「・・・何か？」

子供だろうかと思ひハンスは首を傾げた。こんなところに子供が一体何の用だ。

「すみ、ません、実は・・・」

予想に反して、その人物の声は涼やかな少女のものだった。今まで走っていたからか、息は上がり、言葉はとぎれとぎれだ。

「一番隊の、ヴィルフリートを・・・」

その時、強めの風が吹き、彼女のフードをめくつた。

「あつ」

彼女の方も油断していたのだろう。フードはあっけなくめくりあがつた。

ハンスは、思わずぎよつとした。

黒檀のように黒い髪、雪のように白い肌の世にも美しい少女が、血のように赤く頬を紅潮させて立ったままハンスを真っ直ぐに見つめていたから。

ヘンゼルは物心つく前から、自分がそう歓迎されているわけではないことを知っていた。

自分の家が今現在、街でもかなり貧しいことは、よくわかっていた。

父はしがない樵で、1年ほど前から腰を痛めて以来、仕事が大幅に減った。そうなるとう家にはその日のパンどころか、食べ物自体がなくなることはしょっちゅうという有様だ。

この時代のドイツは荒れ果て、食料は慢性的に不足していた。

そんな危機的状況から救い出す作物ジャガイモが、プロイセン王フリードリヒ2世の普及により人々の飢えを満たすまでには、実にあと100年の歳月を必要とする。

そんな中、母は自分を精いっぱい育ててくれたと思う。

若くして、年の離れた父と結婚した母は、ヘンゼルの目から見ても若く美しかった。

ヘンゼルが3歳の時、妹のグレーテルが生まれた。

正直に言って、何の感慨も湧かなかった。ただ、母親が慈愛に満ちた青い瞳を向けていたので、それが、歓迎されている存在なのだということはわかった。

だから、ヘンゼルは妹を可愛がり、慈しみ、時として身を呈して



その髪は、陽の光を受けて、金色に輝いていた。

ヴィルフリートは表情一つ動かさずに席についていた。だが、彼が落ち着いていたわけではない。心の内では頭を抱えていた。ただ、顔に出ていないだけで。

「なぜあんな殺し方・・・」

ただ金品が目的で殺すのなら、他にも確実に手っ取り早い殺し方がある。焼死は時間がかかる。

扉を閉めていたにしても、ひっきりなしに聞こえるであろう断末魔が、偶然近くにいた誰の耳に入らないとも限らない。

そんなことをせずとも、銃でも、刃物でも、それこそ紐の一本でもあれば事足りるはずだ。

「恨みによるものでは？」

隣にいたレオがそつと口を挟んだ。彼も、あの女性が何の目的でここに来たか知っている。

この村とは20年袂を分かつていた彼女に恨みを抱く人物。たった一人いるじゃないか。

「娘、か」

彼女が20年前捨てたという娘。その後の娘の人生は、それほど幸せなものではなかったらしい。若くして結婚したというのも、もしかしたらそうすることでしか身を守る術がなかったのかもしれない。

い。

この時代、後ろ盾一つない女性が生きて行くのは至難の業だ。

「ヴィル、大変です」

突然かけられた聞き慣れた声に、ヴィルフリートは驚いて振り返った。それでも、傍にいたレオには彼が動揺していることが伝わらないほど表情は動かなかつたが。

「シユネ、なぜここにいる」

そこにいたのは、彼の同居人であるシユネだった。暗い色の外套を着込み、フードで顔を隠してはいるのはまだいい。だが、その横にいるヨハンが、なぜそんな顔を火照らせて目を泳がせているのか。

それも手伝って、同僚たちは、ヴィルフリートの親戚だということの小さな少女に興味津々といった様子でチラチラ窺っている

「今はそれどころじゃありません」

きつぱりとした口調で言い、シユネはヴィルフリートの腕を引っ張った。

「お、おい」

いつにない強引な行動に、つい彼はそのまま従った。しかし、同僚の好奇心を押さえきれない顔と、今では自分の従者的なポジションにいるヨハンの落ち着かない態度が気になった。

「ハンナさんの身に、何かあったのではありませんか」

「……なぜそう思う」

シユネは、時折恐ろしく鋭い時がある。しかし、保護者の身の上としては13の子供に、「昨日知り合った女は何者かに焼き殺された」などは、あまり口にしたくない。

「今日一日街が騒がしく、警吏の方々がたくさん外に出られていました」

「別に普通だ」

「先程の方が、大きな事件があったと。あの表情から察するに、痛ましい事件だったのだと思いました」

(ヨハンめ)

口の軽い部下を、思わず呪った。何でも顔に出るのは人間として好ましく映るかもしれないが、この仕事においては欠点でしかない。

「ヘンゼルの母親が、ハンナの持っていたルビーを持っていました。おそらくは、売るつもりでしょう」

ヘンゼルの母親。

「あの小屋の使用賃は彼女の子供の元へ行くんでしたよね」

シユネの冷静な声に、ヴィルフリートの顔が曇る。あまり想像はしたくなかったが。

ハンナがよそ者であり、一人であり、旅の途中だと知っている者は、限られている。それはヴィルフリートにもわかっていた。

だが。

「彼女は、どんな殺され方をしたのですか」

ここで黙っていることもできた。だが、おそらく彼女は近いうちに知るだろう。

警吏と名がついてはいるが、ほとんどは街の中で腕が多少立つだけの者がほとんどだ。守秘義務などという言葉は考えないし、そもそも思いつきもしない。

誰かが家族に今日の出来事を話し、その家族から他の人間へと話に行くだろう。

娯楽の少ない街で、しかも被害者は街の人間ではない「よそ者」なのだ。

「竈、ですか」

シユネは納得したように何度か頷いた。その顔は冷静そのものだ。保護者であるヴィルフリートとしては、13歳の彼女が恐ろしうに身を竦ませたりしないことに、複雑な思いを抱いていたが。

「しかし、これで証拠も揃ったな。早速、あの女を・・・」

「ヴィル、何を言っているんです」

連行する、と言いかけた彼を、彼女が止める。

「ハンナを殺したのは、あの人じゃありません。もしあの人ならば、他の殺し方をしている」

「あれは恨みからでは・・・」

「恨みじゃありません。犯人はハンナ以上に非力だから、ああいう殺し方しかできなかつただけです。理由はあつたけど、彼女を恨む理由はないのです、彼らには」

「彼ら？」

きつぱりとした口調で、シュネが告げた。

「彼女を殺したのは、ヘンゼルとグレーテルです」

## 5 (前書き)

お気に入りありがとうございます！

「あらあら可愛い子たちね」

家の前でうずくまっている子供たちに、ハンナはにっこりと笑いかけた。

物音がすると思いドアを開けると、そこには二人の子供がいた。痩せ細り、目だけが大きくこちらを見ている。

「兄妹？」

尋ねると、兄であろう少年がこくと頷いた。微笑み返してこなかったことは気にならなかった。

こんな夜に森の中にいたということは、この子供たちは親に捨てられたのだ。

「ちょうどよかった」

彼女は微笑み、二人を招き入れた。

「今、ちょうどパンを焼こうとしていたの。さあ、ごちそうするから入って」

無言で入ってくる二人に、彼女は更に口角を上げた。

.....

「ヘンゼルとグレーテル？冗談だろう。あの二人はまだ子供だ」

兄のヘンゼルが10歳かそこらだったと思う。なぜ知っているかというと、彼らの母親が、たまに警吏隊の支給服を洗濯しにくるからだ。

たまに、あの二人も母親の手伝いをしている。

「あんな残酷な殺し方、子供に・・・」

「子供だからあの殺し方なのです。彼女がパンを焼くか何かのために竈に火をおこした。その時、当然彼女は火が付いているか確認します。それこそ、あの二人が彼女を確実に殺せる唯一の方法なのです」

「まさか、二人なら他にも・・・」

言いかけたところで、ヴィルフリートはさつと顔を上げた。

「しまった。言い合いをしている場合じゃない。犯人が母親だろうが、子供だろうが、とにかくあの親子は取り押さえなくては」

彼はそれだけ言うと急いで執務室に戻り、すぐさま部下を引き連れて飛び出した。

「いいか。レオとパウルは洗濯女のグレーテの家に行け。残りは市場であの親子を探すぞ、急げ」

気合のこもった声と共に、男たちが駆けだす。先頭を走るヴィル

フリートはシュネに視線を向けることをしなかった。だから、彼女が呟いた「そううまくいくでしょうか」という言葉を聞かずに済んだ。

.....

ランドシュテーヘンは小さいが、それなりに商業が盛んな都市だ。そのため、市場は広く活気に満ちている。

そんな中で、グレーテ親子をすぐに見つけられたのは僥倖であると言える。

大人しそうな洗濯女は、虫も殺さぬような顔をしていたが、それでもあのハンナの外套をすっかり着こんでいた。

青ざめ、震える母親とは裏腹に、息子のヘンゼルはいたって冷静に、自分を困む屈強な男たちを見上げていた。

その唇が微妙に綻んでいるのを、ヴィルフリートは見逃さなかった。

(こいつ、笑っている)

子供の手には、そのみすばらしい恰好には到底似合いそうもないルビーの留め金がある。ハンナの着ていた外套の留め金だ。

外套自体は母親が使い、価値のありそうな留め金だけこうして金にしようとしていたのだろう。

「ずいぶんいい物だな。このルビーは一体どうした」

母親のグレイテは彼の質問に、委縮したように身を竦めて答えない。代わりに応えたのは、息子のヘンゼルだった。

「魔女が持っていました」

「何？」

「あの小屋にいたのは魔女です。魔女は僕と妹のグレイテルを食べようとしました。だからやつつけたんです。退治したのは僕たちだから、それは僕たちの物です」

そう宣言するヘンゼルの瞳に、揺らぎはなかった。

.....

貧しい樵の小屋には、腰を痛めて寝ている哀れな男がいた。

彼はどことなく怯えている風で、ヴィルフリートの下下であるレオとパウルが踏み込んだ時も、彼らが戸棚からこの家には不釣り合いな銀貨を取り出した時も、青い瞳を一瞬揺らがせただけで、何も言わなかった。

小屋の中には銀貨の他に数点貴金属があった。おそらくは、ハンナの物だろう。旅の路銀と、それが足りなくなった時のための物だったのだろう。

これで、犯人はほぼ明らかになったはずであり、事件は解決するはずだった。

だが。

17世紀半ば、魔女狩りはだいぶ廃れてはいた。一時期横行した理不尽な尋問や拷問は時代遅れという風潮や、残虐な面からも批難が向けられていた。

そもそも、ほとんどが言いがかりにより、無力な者から財産を取り上げるのが目的だったのだ。

しかし、今回は些か厄介だった。

告発者が幼い子供であり、被害者は既に物言わぬ軀となっているからだ。

「確かにあの魔女を殺したのは僕たちです。だけど、あれは魔女だったのです。だから、僕たちに罪はありません」

確保した後も、ヘンゼルは取り乱すでもなく平然と言った。

取り調べ用の部屋は薄暗く、寒い。そんな中、彼は物怖じすることもなく、優雅とも言える態度で話した。

母親のグレーテが、縮こまってまともに口も利けなかったのに比

べて、その態度は立派と言つべきか、ふてぶてしいと言つべきか。

「彼女が魔女、だと？」

「ええ。あの魔女は僕たちを最初、お菓子やごちそうでおびき寄せました。そうして油断した僕たちを煮て食べようとしたんです」

うそをつけ。

この子供の胸倉を掴んで乱暴に揺すぶりたい衝動にかられながらも、ヴィルフリートは淡々と質問を繰り返した。

「彼女がそう言ったのか？」

「ええ。それに、あのブロッケン山まで集会を開くと」

ブロッケン山とは、ハルツ山地の最高峰であり、この時代はまだ未開の地でもあった。そのため、魔女の集会場所として古くから信じられていた。

かの有名な「ヴァルプルギスの夜」はここで開かれているとも言われている。

ヴィルフリートは、しゃあしゃあと嘘をつくこの悪童の顔を思いつきり張り倒したい誘惑にかられつつ、しかし顔には出さずに尋問を続けた。

「彼女が魔女であるという根拠はそれだけか」

未だ彼が一度もハンナを「魔女」と呼ばないことに気付いているのか、ヘンゼルはじっと彼の顔を見た。うつすらと微笑んでいるの

は、これくらい想定内だったのか。

「いいえ」

彼はそう言っつて、ポケットから一枚の布を取り出した。

「?」

親しみのある匂いに、ヴィルフリートはわずかに眉を寄せた。

「魔法の、空飛ぶ軟膏です。魔法はこれを体に塗っていました。これが、魔法の証拠です」

魔法は空を飛ぶと信じられていたが、それには特殊な軟膏が必要だというのが通説だった。そのため、魔法裁判でもそのありかや製法を聞き出すことができれば、それこそ魔法の証明とされていたのだ。

最も、ほとんどが拷問の際に、あらかじめ用意した答えを無理矢理言わせるだけのものだったが。

このクソガキ、叩き斬ってやる。

ヴィルフリートは一瞬剣に手をやりそうになる自分を必死で押さえた。

このガキは、寄りにも寄ってシユネの純粋な善意を、己の殺人を正当化する道具にしたのだ。

以前シユネから、ネルケがヘンゼルを悪しざまに罵っていたと聞いたのを思い出した。なるほど、ただの姦しい小娘だと思っていた

が、なかなかの洞察力である。

.....

ヴィルフリートは次の日、誰にも気づかれないよう街を離れた。

彼の上司に会ったためだ。彼の上司は警吏の司令官であるが、それは表の上司だ。今回は、裏の上司に用がある。

街で、彼が宰相ハインリヒの子飼いであることを知る者はいないとはいえ、彼の役目は密告ではなく、街の情報を宰相に報告するのがほとんどだ。

名宰相と呼ばれるハインリヒは、そうしていくつもの情報を掴み、今までもランドシュテールヘンを盛りたててきた。

「このままでは無罪になるのは明白です」

実際、彼の表の上司など、あの軟膏ですっかり信じ込んでしまった。また、あの小憎たらしいガキが、いかにも利発に語るものだから、すっかり聞きいってしまっていた。

裁判にかけるまでもない。

あの人のいいまぬけな男の眼はそう語っていた。

ヘンゼルの話はすっかり街中を駆け廻り、どんどん誇張されてい

く。  
そのうち、あの小汚い小屋はお菓子で出来ていた。などと馬鹿げたデマまで流れそうな勢いだ。

そんなヘンゼルやその母親が釈放されるのも、おそらく今日明日のことだろう。

しかし、それで一件落着になるわけがない。相手は、どこぞの貴族の奥方かもしれないのである。

「貴族の奥方？」

それまで、どこか面白そうに聞いていたハインリヒはふと顔を上げた。

「なぜそう思う」

「彼女の持ち物の中に、ある刻印がありました」

そう言って、ヴィルフリートは紙を取り出した。

「ルビーの留め金に、紋章が刻印されてたのです。生憎持つてくることができませんでしたが」

「それで絵に描いて来たのか。・・・上手いな。お前が描いたわけじゃないだろう」

「・・・シュネが」

ヴィルフリートは、器用な同居人の顔を思い出した。彼女は、自

分の軟膏が、結果としてハンナの名譽を汚した事実には、顔には出さないが、それなりに憔悴している。

同時に、怒ってもいるが。

「そうそう、シユネだ。お前、次は必ずあいつを連れて来い。あいつの話を知っていると、広い中庭でバラだの百合だの育てているのが馬鹿らしくなってきた」

「・・・魔女の軟膏でも作らせるつもりですか」

「それも悪くはないが、アマリアの奴が最近やたら寂しかったな。姉の方が嫁いでしまったものだから、友達が欲しいらしい」

宰相の末娘の顔を思い出そうとして、どうしても浮かばなかったヴィルフリートは、無難に頷いた。

「しかし、この紋章。これは厄介なことになりそうだな」

彼は、その紋章に覚えがあった。

それは、近隣にある国の伯爵家の物に、よく似ていたからだ。

6 (前書き)

ちよつと長いです

その夜、一人の男がその街にやってきた。

彼が接触した小屋の持ち主は、すぐさま警吏のヴィルフリートの家へと走った。そうするよう、あらかじめ彼が言い含めていたからだ。

「なるほど」

彼は頷き、同居人に顔を向けた。

「やっぱり、そうでしたでしょ？」

彼女は笑い、手にあるルビーの留め金を見て、小さく笑った。

.....

その少し前のことである。

「それにしても、やりきれないな」

ヴィルフリートはハンナの残したルビーを見ながら呟いた。その留め金の裏には、小さな刻印がある。

「グレーテは知っていたのか。自分の子供が母親を殺すと・・・」

「ヴィル、何を言ってるんです」

シユネが顔を上げ、少しだけ驚いたように言った。

「彼女は、ハンナの娘じゃありませんよ？」

「なぜだ。だって、あの小屋に客があったことを知っているから、彼女は子供を差し向けたわけじゃないのか」

自分の不幸の原因が、全て母親の身勝手のせいだと思ったからこそ、恨んでいるのではないのか。

「それに、彼女があ的小屋を使っていると知らなかったわけがないだろう。じゃなければ、偶然か？たまたまあのガキどもは森に入っつて、たまたまあの小屋を見つけて、たまたまその日に限ってハンナがいたのか？その可能性は低いだろう」

「いえ、知っていたのはヘンゼルです。ヘンゼルだけが、ハンナの血を引いているんです。お気づきじゃないですか？彼の瞳はヘンゼルです」

ヘンゼルの瞳は、両親が青い瞳と、茶色い瞳であることが多い。

「少なくとも、グレーテがハンナの娘の可能性はほぼないのです」

「なぜだ」

「ヴィル。焦げ茶の瞳の人から、青い瞳の子供は、基本的に産ま

れません」

ヴィルフリートは、先程自分が連行した女の顔を思い出した。確かに彼女は、深い青い瞳をしていた。

「ハンナの娘さんは、もう既に亡くなっていたのです」

これはのちに確認をとったが、確かに、あの家の男は一度妻を娶ったが、息子を産むと同時に妻は死亡している。

妻の髪も瞳も、濃いブラウンだった。

.....

ヘンゼルの世界は、常に3種類に分類されている。

一つは気に入ったもの。もう一つは、気に入らないもの。もう一つは、どうでもいいもの。

あの旅の女からせしめた金品や宝石、食料は気に入ったもの。

自分の話を感じて聞いていたあの頭の悪そうな司令官とやらも、彼は気に入った。あの眼には、自分への尊敬がこもっていたから。

気に入らないのは自分を貶めるものだ。

自分たちの貧困さを嘲笑い、からかう街のくだらない連中は、その最たるものだ。

この前は、男に媚びを売るしか能のなさそうな女にからかわれ、女の外套を汚してやった。あれだけ汚してやったら、もう洗っても

あの色は取り戻せまい。

その時のあの女の顔だけは気に入った。

そして、どうでもいいものは、これが一番多い。

まずは家族。

あの頭の足りない父も、母も、妹も、心底どうでもいい。

母の愛を得ようとグレーテルを可愛がったのも、そうすることで、自分がこの家で快適に暮らせるからだ。

だから、母が貧しさのあまり自分を捨てようと父に言い出した時だって、別に腹は立たなかった。

自分を貶めている連中と母は、似ているようで大きく違う。

母は、別に自分を憎んでいるわけでも、悪意があるわけでもない。

彼女は、ヘンゼルが産まれた時から、彼を傷つけたことがない。

淡々と、まるであちこちから頼まれた洗濯物を洗う時のように、黙々と彼を育ててきた。愛情は持っていなかったのかもしれないが、憎しみも、蔑みも持つてはいなかった。

ただ、貧しいからその打開策を出したただけだ。確かに、あのままでは自分たちは飢え死にしていた。それならば、誰かが犠牲になるしかない。

そして、たいして役にも立たない子供がその役目を負うことも、自然な流れだ。

グレーテルではなく自分が選ばれたのも、自分なら運が良ければ生き残る可能性が高いからだ。

とはいえ、自分だって野垂れ死にはごめんこうむりたい。

そんな時、ヤーコプじいさんがヘンゼルに小銭を寄こしに来た。あのじいさんは昔から律儀に小屋の使用料の分け前を持ってくる。大した額ではないが、それでも何かの足しにはなる。

いつもはそれだけ思うところだが、今回は違った。

一人旅の女。

じいさんが何気なく放った言葉は、ヘンゼルにとって天啓だった。

そうだ。

金がないなら、あるところから奪えばいいだけだ。

「お兄ちゃん」

妹が纏わりついて来た。頭の足りない、どうでもいい妹。

だが、囿くらいには使えそうだ。それに、妹は外見は母に似て悪くない。明るい金髪と澄んだ青い瞳は、さながら天使のようで大人の女には受けがいいかもしれない。

「どうしたの？お兄ちゃん」

「何でもないよ」

いつものように、慈しむような笑みを向けると、ヘンゼルは妹に囁いた。

「グレーテル、お腹が減ったろう？今から魔女の家に行こう。魔女をやっつければ、僕たちはお金持ちになってお腹もいっぱいになれるぞ」

.....

裁判になることもなく、晴れて釈放、しかも魔女を退治した英雄であるはずのヘンゼルは、自分を送る男の目がやけに気になった。

大体、この男は最初から気に入らない。取り調べの際も、ヘンゼルが何を言おうが、何を出そうが、一貫して表情を変えない。それでいて、その瞳は自分を真っ向から疑っているのがよくわかる。

「そうだ。あのルビー、返してもらえますよね」

あのルビーの留め金は、それなりの値打ちがあるだろうとヘンゼルは踏んでいた。宝石など、見るのも初めてだったが、あんな風に刻印が入っているとすれば、それなりの品だろうと踏んでいた。

何よりも、あの輝きだ。あの真っ赤な光に、母と妹がすぐさま魅了された。彼はそれを冷やかな目で見ていた。

金になることはヘンゼルにとってもありがたかったが、それだけだった。それは、彼が男だからか、それとも美しい物を見て感動する心が足りないのか。

「ああ、あれか。あれは返すわけにはいかない」

あつさりと告げた男を睨みつけると、彼は素知らぬ風を装いながら、淡々と答えた。

「なぜですか」

「あれは、彼女の持ち物じゃなかったからだ」

それだけ言うと、彼は立ち止った。その視線の先には、彼の同居人である少女が立っている。わざわざ庁舎まで来るとは。ヴィルフリートは一瞬目を細めたが、何も言わなかった。

彼女は無言のままヘンゼルに向ってまっすぐ進む。歩きながら、顔を覆うフードを取り外した。

この辺りでは珍しい、漆黒の髪が一瞬空を舞い、ヘンゼルは思わず吸い寄せられるように見入った。

しかし、彼女はそんなヘンゼルの様子を意にも介さず、黒い瞳を彼に向ける。

黒曜石のようなその瞳は、あのルビーよりも遥かに価値がありそうだった。

「何か用かよ」

しかし、自分から目を逸らすことなく睨みつける姿勢は気に入らなかつた。

目の前の少女の美しい瞳は、ヘンゼルを貶めていた。いや、もっとひどい。彼女の眼は、はっきりと彼を侮蔑していた。

「思い切りましたね」

彼女は澄んだ声でそう告げる。

あの様子から、何かしら侮辱の言葉を投げつけると思っていた。もしそうなら、あの綺麗な顔をどんな手を使っても傷つけてやろうと思っていたが。

「は？」

「ハンナさん、亡くなる前に私に言っていました。20年前、残してきた娘のために来たのだと。彼女、実はこの街の出身でしたが、隣の国の伯爵家の奥方になられたのです」

ヘンゼルにとっては、どうでもいい話である。あの女が魔女ではないことは知っていたが、まさか、お貴族様だとは。

「だから？」

平然とした態度を装いつつも、これは少しまずいかもしいないと、ヘンゼルは頭であれこれ損得勘定を始めた。

「ハンナさんが残してきた娘さんとは、あなたのお母さんですよ。グレーテさんではなく、あなたを産んだお母さん」

「は？」

産みの母親？

一瞬、何の話かと思った。ヘンゼルは、その人物を意識したことがなかったから。物心ついた時には既に、あの母親がいたのだ。美しいが、愚鈍な女。

「それにしてもハンナさんが魔女だったとは、驚きました。もしあなたが彼女を退治しなければ、彼女は今頃あなたを見つけ、大事に屋敷へ連れて帰ったでしょうね。できるだけのことをしたと言っておられましたし、館を一つ持っているとも言っていました。一生、食べるに困らなかったでしょうに」

思い切りましたね。

そう、少女はもう一度言い、踵を返した。歩きながら、フードを再び被り、その美しい姿が隠れる。

「そんな・・・」

ヘンゼルは、ようやく理解した。

血の繋がった祖母を手にしたことはこの際どうでもいい。

だが自分は、ちっぽけな小金のために、振って湧いた人生最大の幸運を、自ら放棄したのだ。

彼は再び歩き出すこともなく、ただ茫然と立ちすくんだ。

.....

「お前も意地が悪いな」

「いけませんでしたか？」

「いや、あれくらいちょうどいい」

今も思い出すが、あの間抜け面は最高だった。

ヴィルフリートは居心地のいいソファに座りながら、上機嫌で緑茶を口に含んだ。やはり、シュネの薬草茶クロイターデーの方が、彼の好みだ。

あの茶番があった次の日、二人は揃ってハインリヒの館に報告に來ていた。ハインリヒは、あまり報告書を好まない。

それは、証拠に残す物を残したくないからだ。

特に、公にはできない今回のような話は。

「楽しそうだな、ヴィルフリート。そういう時くらい、笑顔を浮かべたらどうだ」

今まで報告を聞いていたハインリヒは、おかしそうにそう言って笑っている。

「しかし、そのヘンゼルってガキはなかなか使えそうだな」

「危険極まりないですよ。自分にとって損だと認識すれば、躊躇なく裏切る。私としては、あんな危険なクソガキはさっさと始末された方がいいと思っておりますが」

宰相を前に、言葉遣いが悪かったかもしれない。

彼は言った後そう思ったが、ハインリヒは気にする風でもなく、楽しそうに聞いている。

「得だと判断している間は、けして裏切らないとも言えるだろう。妹のグレーテルとやらも揃えて、俺が鍛えてせいぜいこき使ってやる。妹の方も、7歳の子供の身で殺害と虚偽の告白に協力するとは、なかなか見所がある。それに、その方が安全だろう」

「・・・安全ですね」

シユネは頷いた。あの両親は役に立つまい。何しろ、父親は腰を痛めたままだし、母親は、心労のせい最近幻覚が見えるらしい。女の幽霊に追われるなどと叫び取り乱していた。あの様子では、近いうちにどこぞの川にでも落ちて死ぬのではないか。

ヘンゼルとグレーテルだけは、ルビー以外の宝石を換金したり、せしめた路銀で食料を買い込んだのか、以前より断然肌つつやがよい。

「あのハンナが、まさかそんな大それたことを計画していたとはな」

ヴィルフリートも、未だ信じられない。

「本物のハンナという女は、もう死んでいたのか」

そう、本物のヘンゼルの祖母は、とうに亡くなっている。

一人の男が、人目を避けながらあの小屋にやってきたのは、昨日のことだった。

あらかじめ言われていた真面目なヤーコプは、すぐさまそれをヴイルフリートに報告した。彼はその男に身分を明かし、2、3話した後、彼を解放した。

彼は、ただの旅の者だと話したが、その歩き方や身のこなしで、それなりに訓練を積んだ者であることが、ヴイルフリートにはわかった。

「つまりはこうです。ハンナと名乗った彼女は、ハンナの娘と、子供がいればその子も殺すためにこの街に来ていたのです」

最初シュネがそう語った時、ヴイルフリートは何の冗談かと思っただものだ。

「それがわかったのは、あのルビーの留め金です。あれには仕掛けがありました」

そう言ってシュネが取り出したのは、あのルビーの留め金である。

「こうやってルビーの部分だけ回転するんです。こういう仕掛けは高価ですからね。きつと、依頼主の物でしょう。だから、伯爵家の刻印があったのです。その裏には、鉄の帽子トリーカプの粉末が入っていました。この花は、根、草、花粉まで猛毒です」

「つまりはこういうことです。確かにこの村にいたハンナ・・・」

かは存じませんが、女は隣国の伯爵に見染められて、家族を捨てていて行き、貴族の子供を産みました」

「その子は長じて嫡子となれた。ですが、血統を重んじる伯爵家では、これは世間には公表できない醜聞でもあります。女が死んだ後、子供がいることを聞いていたその嫡子・・・ではなく、違う誰かと信じたいですが。誰かが、彼女の血を引く子供を亡き者にしようと言論なのでしょう」

何より彼らにとって許せなかったのは、おそらく、由緒正しい伯爵家当主と、卑しい下々の者たちが半分とはいえ血が繋がっているという事実だろう。

「ふん、血統など、もう時代遅れと言つに」

ハインリヒは、吐き捨てるように言ったが、同時に納得したようだ。血統にこだわる人間たちを、この中で一番見てきたのは、間違いない彼である。

それに、あの家はかなり格式高かったはずだ。

「ハンナは慣れぬ旅で足をくじいていた。もしかしたら、その傷がヘンゼルたちを救ったのかもしれない。今思えば、彼女には迷いがあつたように感じられます。事情を知っていた揚句むやみに他人に話したり、武器ではなく毒を持っていたのも含め、プロではなかったのでしょうか」

「おそらく、似た女を使つたとかじゃないですかね。似ていれば、母と名乗って相手を油断させることもできる。それに、所詮相手は女とその子供です」

ハンナは、亡き奥方の子供や孫を消すために雇われていたのだ。昨日来た男は、彼女が失敗、もしくは裏切っていないか確認に来たのだ。こちらはプロなのだろう。もしそうならば、彼女を始末した後、彼が代わるために。

彼がヘンゼルに行きつくのも時間の問題だ。だから、あの二人はこの宰相が引き取ることになる。

ただし、宰相の手足として、裏の仕事をするためだ。この宰相はこう見えて相当に冷酷だ。これからハードな教育があので二人を待っていることになる。幸せかどうかはわからない。

それにしても、ヘンゼルが主張した魔女に殺されかけたというのは、あながち間違っではないなかったのだ。

少なくとも、ヘンゼルにとっては、己の命を狙う魔女に間違いなかったのだから。

「でもそれを教えてやらず、それどころかあんなことを言ったのは、シユネの意地悪だな」

「私の軟膏を、魔女の軟膏だなどと言うからです。当然の仕返しです」

そう言っつて、シユネはつんと顎を逸らした。この屋敷に来て、彼女が初めて表情を変えた瞬間である。

「まあいい。シユネ、この前言っつていたハーブをいくつか取り寄せておいた。よければお前が植えて、たまには見に来てくれ。上手く育てば、いくつかかわけてやる。どうせあの頭の固い街では、おおっぴらに育てられまい」

いくつかわけてもらえると聞き、シユネに断る理由はない。

「あ、しかしその前にうちのアマーリアに会ってくれないか。退屈してるらしくてな」

「アマーリア様、ですか」

こちらは些か返答が遅れた。確か、宰相の末娘はまだ7歳かそこらだったはずだ。

.....

「面白い！シユネ、もっと聞かせて！ヘンゼルとグレーテルは、その後どうなったの？」

「魔女を退治した兄妹は、魔女の持っていた宝石を持って家に帰るのでした・・・」

とりあえず、世間で出回っている部分だけを話しておいた。

困ったことに、この令嬢は年上の遊び相手を当てがわれるや否や、「おはなし」をせがんできたのだ。

最近嫁いだ姉が、毎晩彼女に絵本を読んでやっていたかららしいが、シユネが同じことをしようとする、もう飽きたと言いつつ放ったのだ。

仕方なく、話して聞かせたのがこれだ。

「家に帰りついた二人は、めでたしめでたし宝石を売り、お金に困ることはなくなりました。・・・E i n H a p p y E n d」

## 6 (後書き)

ヘンゼルとグレーテル編終了です。  
次回から新章スタート。

## プロローグ(前書き)

新章スタートです。

## プロローグ

エリゼが仕える主であるリーゼル姫は、残念なことにあまり賢くなかった。

もう16になるというのに、彼女は己の役割を理解してはいなかったのだ。

その日は、リーゼルの輿入れの日だった。

兄のユリウスをはじめ、家族がどれほど心配し、かつ、この娘に務まるだろうかと心配していても、彼女以外に年頃の娘、しかも相手に釣り合う身分の娘はいないのだ。

「わかってるわね、リーゼル。これからはどうか我儘をおさえ、夫を支えて良き妻、母となるのですよ」

母も父も、娘の身を心配をするよりも、娘が何かしでかさないか、そっちの方が心配だったのだ。

この結婚は、それほど意味があるものだ。

だからこそ、たくさんの嫁入り道具を持たせ、兄のユリウスまで立会人としてついていくのだ。

そして、侍女が一人。本来あちらの家の侍女がつく。花嫁とはい

え、人質の意味合いもある婚儀において、こちらの息のかかった侍女を連れて行くのはあまりいいものではない。

だが、それではあまりに心もとない。いつかボロが出るだろうが、賢く、長年仕えてきてくれたエリゼがフォローしてくれれば、なんとかなると踏んだ。いや、願った。

複雑な感情が入り混じった親子の別れの中、今現在既に起きている事態の深刻さがわかっていないのは、リーゼルだけだった。

.....

「姫様、お疲れになりましたか」

エリゼは、馬車の中から景色ばかり見ている主人に声をかけた。

普段はやたらやかましい娘が、今日は妙に静かで大人しい。さすがに緊張しているのかと、隣で馬を走らせていたユリウスも、思わず覗き込む。

「少し酔ったみたい。あの小川のところで一度降ろしてくれない」

「かしこまりました」

普段に比べたら、ずいぶんかわいい我儘だと、エリゼはにこやかに御者に声をかけた。

「エルンスト様は確かに4男だが、親族婚ばかりで、なかなかよその領地から妻を娶らないあの家が頷いてくれたのだ。リーゼルにはくれぐれも注意してくれ。万が一にも、逃げられたりせぬように」

姫が一人になりたいと言ってエリゼを遠ざけた時、ユリウスはこっそりとエリゼに耳打ちした。エリゼも神妙な顔で頷く。

「はい、若様」

「その若様も、もう変えた方がいいな。次にお前がそう呼ぶ相手は、リーゼルの子供だよ」

「そうでした」

くすりと笑ったエリゼとユリウスは、お互い、今日初めて笑ったことに気付いた。どうやら、相当に緊張していたらしい。

エリゼは貴族の出ではなかった。

身分にこだわらない宰相の館の侍女だったのだが、幼い頃、たまに宰相の家に行ってきたリーゼルがねだったのだ。幼い彼女にとっては、同年代の侍女というのはたまらなく魅力だったらしい。

わがままであまり賢くはなかったが、リーゼルは性根の悪い娘ではなかった。だから、エリゼにとっても、それ自体はそう悪くなかった。

だが、リーゼルの我儘についていける娘は少なく、気付けばエリゼが一番傍にいることが多くなった。そうなると、自然とリーゼル

と年の近い兄、ユリウスとも言葉を交わす機会が増える。

もちろん、身分を考えると恐れ多いことだが、エリゼにとってユリウスは憧れの的だった。今だって、こっそりと胸が高鳴っている。

リーゼルと同じ明るい金髪と神秘的な湖を連想させる青い瞳に密やかに焦がれるくらい、何の罪があるうか。

「それにしても、リーゼル様は一体何を……。一応見てきますね」

「ああ、頼む」

気軽に言ったエリゼだったが、そこで驚愕の事実を知ることになる。

.....

それにしてもいい天気である。空気は澄み、小川の水は清らかだ。こんな大仕事の途中でなければ、鼻歌の一つでも出ていたかもしれない。

先程の会話と、気安く掛けられた「頼む」で、すっかりいい気分になったエリゼは、頬を赤らめながら主人の元へ急いだ。

「リーゼル様？まあ、何をしてらっしゃるんですか。洗濯なら私がいいたしますから」

そこにいたのは、小川の水でハンカチのような物を洗うリーゼルの姿だった。エリゼが声をかけた瞬間、姫はなぜだかギクリと身を震わせた。その姿には見覚えがある。というより、毎日毎日こんな姿を見つけては、追いかけて来たのだ。

「リーゼル様？一体何を汚されたんです」

隠される前に素早く回り込んで覗き込むと、彼女が洗っていたのはハンカチではなく、下着だった。

一瞬、エリゼはリーゼルが、乙女としては恥ずかしい失態を犯してしまったのかと思った。それなら、彼女は素知らぬふりをしてやった方がいいだろう。

そう思った瞬間、その布にべっとりとついている鮮やかな赤が目についた。

月のものだろうか。でも、それなら見るのは慣れていた。確かにそれも恥ずかしいが、このお姫様が、小川の冷たい水で自ら洗うことにはならない気がする。それをするなら、彼女はエリゼを呼びそっうだ。

それに、リーゼルの月のものが数日前に終わったことは、エリゼも把握している。

(じゃあなぜこんな血が・・・)

そこで、エリゼははっと主人を見た。彼女は、ばつが悪そうにぶい顔と顔を背けている。

「まさか！」

「な！何よ！ちょっとだけよ！ちょっと、お嫁に行く前に想い出が欲しいと言ったらこんな・・・わ、わたくしだって痛いばかりで二度とあんな・・・」

決定的だった。

「姫様！何という、何ということをお母様！ああ！お母様がこれを知ったら心臓が張り裂けるでしょう！」

青ざめ叫ぶエリゼの声に、近くで待機していたユリウスがただごとではないと駆けつけた。

「どうしたエリゼ！何をしでかしていた！」

ユリウスとて、自分の妹の性格くらい把握している。今度は何をしでかしたという思いと、国境を超える前によかったという思いが交錯しながら、彼は叫んだ。

「エリゼ！お兄様には黙ってて、お願い」

「黙っていられません！ユリウス様！リーゼル様は、リーゼル様は純潔を失っておられます！」

「なにイ！？」

普段物静かで冷静沈着と評判のユリウスも、この報告には思わず声が裏返った。

「このっ……バカ娘！」

心の底から、ユリウスは叫んだ。

件の「バカ娘」が事に及んだのは、昨夜のことらしい。明日は嫁ぐ身だからと、自由にさせてやったのが今になって悔やまれる。

それにしても、先程まで静かだったのは、まさか下半身が痛んでいたからだったとは。

しかし、破瓜の血で汚れた下着を部屋に残して行かなかったのは、せめてもの救いだった。もし母がこのことを知れば、エリゼが言うように本当に心臓は破裂していたかもしれない。

「な！酷いわお兄様！」

「酷いのはお前だこのあばずれが！お前のせいで、うちの家や領民はどうなると思う！？この結婚のためにどれほど俺たちが苦勞したか……それを、一瞬で駄目にしやがって」

「何よ！お兄様にはわからないんだわ！恋に苦しんだことなど、ないでしょう！」

「俺にだってあるわ！」

「ユリウス様、ユリウス様。今はそれどころではありません。何とか、誤魔化すことはできないでしょうか」

エリゼとて、リーゼルと同年のうら若き娘だが、ある程度知識はある。

何と言っても貴族の家で働く庶民だったのだ。貴族の男が、今までどれほど抵抗もできない弱い立場の娘に無体を働いてきたか。

だからこそ、彼女たちは母親から、身を守るために男が女に何をするか、どうなるのか、しっかりと教わっていた。

「例えば、こっそり赤のインクを染み込ませるとか。どうせ洗うのは私たち侍女の役目です。さっさと捨ててしまえば、証拠は残りません」

「そうは言うが・・・わかる可能性が高いだろう。その・・・最中に。しかも、遊び慣れてる男なら、まず気付く」

「そんなものですか」

エリゼにはわからない。何しろ、エリゼだって乙女なのだ。知識はあれど、未だ穢れを知らぬ身だ。というより、憧れの若様がそんなことを知っているのも、何となく複雑だ。

「しかしどうすれば・・・」

「ねえエリゼ。わたくし喉が渴いたわ。わたくしの杯を持ってきてちょうだい」

真剣に顔を突き合わせて相談する二人に、場違いなリーゼルの声が響いた。この姫様は、これほどに兄と侍女が青ざめていても、事の重大さに気付いていないのだ。

「「そこで腹這いになって飲んどけ（お飲みください）！」」

二つの声が重なりあった。ユリウスは苛立ちのため余裕がなくなり、エリゼは、焦りのあまり地が出てしまったのである。

二人は顔を見合わせ、一瞬気まずさに苦笑したが、すぐに現実に戻った。ここであまり時間は食えない。何しろ、国境を越えれば迎えが来ていてもおかしくはない。

「それより……」

ユリウスは言いかけ、一瞬エリゼを見た後、口ごもった。

「……何です？」

「いや……」

「おっしゃってくださいユリウス様。私にできることがあるのなら、何なりと」

エルゼとて、この結婚の重要性は認識している。もしここで花嫁の純潔を理由にこの結婚が白紙に戻れば、ランドシュテーヘンはヴェルフ家との縁が閉ざされてしまう。

この時代のドイツにおいて、力がないことは直結的に破滅に繋がる。

「……お前と、リーゼルは髪の色も、瞳の色も、背格好も似ているな」

そう言って、ユリウスはエリゼの金色の髪に手を伸ばした。彼がこのようにエリゼに触れるのは、初めてのことだった。こんな時だ

というのに、エリゼの胸は高鳴る。

「ユリウス様……？」

緑色の目を大きく見開き、エリゼはユリウスの次の言葉を待った。彼は辛そうに一瞬顔を強張らせ、しかし、すぐに強い光を宿してエリゼを真っ直ぐに見詰めた。

「ヴェールで顔は隠れるし、寝所は暗い」

「ユリウス様……それは……」

「エリゼ頼む！一晩、初夜だけリーゼルの身代わりとなってくれ！」

一瞬、何を言われたのかわからなかった。

きつと、数秒自分は固まっていたと思う。気がつけば、憧れの若様の視線が自分だけに注がれている。何もかも忘れて、それだけを見つめていたいと思いつつも、悲しいことに彼女の頭からは、今起きている問題が離れていなかった。

「私が……初夜だけ身代わりに……」

「後生だエリゼ。けして、その後は悪いようにはしない！あの場に残りたくなければ、すぐに代わりの侍女をやる。お前は故郷に戻ってもいい。その後誰に恋しても、必ずや後盾となる。純潔に關しても、文句は言わせない」

ユリウスは、自分の身分も、相手の身分も忘れたように、エリゼ

の前に平伏してみせた。

「若様！」

「お前にとって残酷な頼みだということはおわっている。気が済むまで俺を殴ってくれてもいい。だから頼む」

それは、エリゼにとっては酷く残酷な頼みだった。もし、これを命じたのがリーゼルの父親なら、苦しみつつも、エリゼは頷くことができた。

千々に乱れる心を抑えようとすれど、胸の痛みは強くなるばかりで、しまいには視界がぼやけた。地面に落ちた水滴で、初めて自分は泣いているのだと気付く。

自分は今、恋していた相手に、知らぬ男に身体を開けと頼まれたのだ。

威圧的に命じてくれればよかった。それならば、エリゼはただ己の不幸を嘆き、ユリウスを恨めばよかったから。

しかし、彼は頼んだのだ。しかも、公爵家の一員であるユリウスが、身分も持たないただの小娘に、平伏までして。

エリゼは泣いた。声も嘔れよとばかりに慟哭した。

それは、悲しい決意のためのものであった。

それがわかり、ユリウスは彼女の腕を引き、頭を自分の胸に押しつけた。彼女が自分をどのように見ていたかは知っている。

そして、自分はそんな彼女の想いを利用し、この理不尽極まりない要求を呑ませたのだ。

時間はあまり残されていない。それはわかりつつも、彼はエリゼが気が済むまで泣かせてやった。

5。 ユリウスが愛しい娘にしてやれるのは、たったそれだけだったか

「つまり、大変なことらしい」

「・・・それはわかりました」

馬車の中でシュネは、神妙に頷いた。馬車に乗ることは初めてではなかったが、こんなに立派なものは当然初めてだった。

(シートがふかふか)

せつかく本を貸していただいたのに、この居心地の良さでは眠くなってしまふ。しかも、道がなだらかなせいか、微かな揺れが、かえって眠気を誘うのだ。

窓の外を見ると、彼女の保護者兼同居人であるヴィルフリートが騎乗して馬車のそばから離れない。一応護衛という立場だからだが。

彼の吐く息は白い。外はどうやら寒いようだ。ふかふかのシートと、羊毛で作った膝掛けのおかげで、シュネとハインリヒはぬくぬくとまどろみながらの快適な旅であるが。

ちなみに、今回は裏の仕事とは無関係である。

「一応今回はお忍びだからね、あまり屋敷の者は連れていけないんだよ」

資金源の一人である彼が警吏隊の司令官にそう言えば、駆り出されるのは一番腕が立つヴィルフリートになったまでだ。

「それなら、なぜ私まで？」

「だって退屈だろう。あんな仏頂面とかしこまった従者。むさくるしいことこの上ないじゃないか」

飄々と答えるこの国の宰相は、背もたれに体重を預け、窓の外からヴィルフリートに笑顔で手を振った。ヴィルフリートの方はそれに一瞬だけ目を向けるものの、すぐさま前を向く。

「気付いてないふりをしたな。まあ、バレバレだけど」

「仕方ありません。彼はこういう厄介事が好きではないのです。何も考えずに剣を振るえたら理想的だってこの前零してましたから」

「なるほど」

「それに、今回のような複雑な思惑が絡むのが、一番苦手なので  
す」

「だろうな」

実際、ハインリヒだって苦手だ。

彼は、公爵から直々にその相談を受けた後、すぐさまヴィルフリート  
の元へ鳩を飛ばし、呼び寄せた。

「あのバカ姫がまたやらかしたらしい」

忌々しそくに告げるその声はいつもより3割増しで低かった。

「バカ姫・・・？もしや、この前お輿入れしたリーゼル様のこと  
ですか」

ヴィルフリートが呆れ声を出すのもいたしかたない。 magari なり  
にも公爵令嬢を「バカ姫」呼ばわりするとは。以前から思っていた  
が、この人は口が悪い。

それに、失礼にも程がある。

リーゼル姫と、ブラウンシュヴァイク＝リューネブルク公の弟で  
ある、ヴェルフ家のエルンストの婚姻がめでたく成立したのは、ラ  
ンドシュテールヘンに住む者にとってどれほど僥倖か。

今から向かうゲッティンゲンを始めハノーファー、リューネブル  
クなど広大な領地を治めるヴェルフ家との繋がりには、ぜひとも持っ  
ておきたい。

また、ここから近いゲッティンゲンを足がかりに商業の手を伸ば  
しやす。

一方、ランドシュテールヘンは小さいが商業が盛んであり比較的豊  
かだ。また、ここ数年宰相ハインリヒが育てた警吏隊は、常備軍と  
しても通じる。

つまり、こちらは向こうの政治力を、向こうはこちらの財力を、それぞれ利用するための大事な婚姻なのだ。

とはいえ、16の乙女が国を背負って見知らぬ男の国へ輿入れする姫を、ヴィルフリートは哀れに思ってもいた。

「いやそれがさ。乙女じゃなかったんだって」

「……は？」

「乙女じゃなかった。だから問題なんだよ」

そういった問題には巻き込まないで欲しい。ヴィルフリートはそう思った。

「……私は剣を振るうしか能のない、無学な人間ですから」

「それはわかってるけど、こんな世の中だし、道中物騒じゃないか。だから護衛を」

「仕事がございます」

ぴしゃりと言ったヴィルフリートは、顔には出していないが必死だった。なぜこの御仁はいつも彼を使おうと思うのか。屋敷にはもっと適当な人材がいるじゃないか。

ましてや嫁入りした姫君が乙女じゃなかったと知ったところで、彼に何かできるわけもない。むしろ、絶対に関わりたくない。

大体若い娘は苦手なのだ。近所に住むあの姦しいネルケも苦手だし、同居人のシュネだって何を考えているのかわからないくらいな

のじ。

「・・・そうか」

納得したようにハインリヒが頷いてくれたので、彼はようやくほっとした。どうにか、今回は厄介事を免れたらしい。

そう思っていたのに、次の日上司がわざわざヴィルフリートの元へやって来て、宰相のお忍びの遠出の護衛を命じられたのだ。

(・・・なぜだ)

彼の叫びは、心の中だけのものだったために、誰も答えることはできなかった。

.....

ランドシュテールへの公爵家では、花嫁となった娘は婚姻が無事成立するまで素顔をヴェールで覆うという風習がある。

というのが、ユリウスが急遽作りあげた言い訳だった。むろん、真っ赤な嘘である。

「いいな？エリゼ。絶対にヴェールは取るなよ」

「はあい、わかっておりますわ、お兄様」

エリゼは、いつもより1オクターブ高い声と、常日頃傍にいるリーゼルの喋り方を何とか真似てみた。

「わたくし、そんな言い方はしないわ」

すかさずリーゼルが抗議したが、兄のユリウスは、内心なかなかのものだと感心していた。さすが長年一緒にいただけある。

急遽作りあげた設定だったが、何とかエリゼを寢所に送ることができたと、ユリウスは胸を撫で下ろした。

ゲッティンゲンのヴェルフ家の屋敷には、今現在花婿となるエルンストと、その従兄であり幼馴染のキュルドしかいない。これも幸いした。

ゲッティンゲンはカレンベルク侯であり、エルンストの兄であるゲオルクの領地だが、彼が来るのはあと3日ほどである。

そこであらためて宴を開き、エルンストとリーゼルは、今度は長兄に会うためハノーファーへと向かう予定である。

花婿のエルンストは、優しげな顔立ちの線の細い青年だった。年は二十歳そこらだったはずだ。品のいい口元を柔らかくほころばせ、彼はエリゼ、いや、公爵令嬢リーゼルを優しく出迎えた。

ランドシュテールへの風習をユリウスが語ると、彼は疑う様子も見せずに、花嫁の意思を快く尊重してくれた。

本来、嫁に来ている身である以上、こちらの風習を持ちこむのは不躰な願いであるというのに、彼は笑って許してくれたのだ。隣で彼の従兄が一瞬眉をしかめたにも関わらず。

その様子から、彼の穏やかな人柄が伝わってくる。一晩とはいえ、身を任せるのがこの人でよかったと、エリゼは心底そう思った。

あとは、上手く彼と一夜を過ごせばエリゼの大役も終わることができる。

・・・はずだった。

「では、事が終わったら計画通り」

「はい。私が水を飲むから侍女を呼ぶとエルンスト様に断り、外に出ればよいのですね」

「ああ。すかさずそこでリーゼルと入れ替われば、この計画も終了だ」

一度覚悟を決めてしまうと、心配事は純潔を失うことよりも、この計画が成功するかどうかのみになってしまった。

それに、純潔の問題は自分だけの問題だが、この計画が万一失敗でもすれば、ヴェルフ家を侮辱したとして、結婚が無効になるだけでなく、ランドシュテールヘンにも被害が及ぶ。

それを想像し、思わず身震いすると、ユリウスが心配そうに「寒くないか？」と訊いて来た。ガウンを纏っているが、その下は薄地の夜着だけなのだ。

「いいえ」

「慣れない土地だからな、風邪引くなよ」

「大丈夫です、故郷ですから」

エリゼがこともなげに言うと、ユリウスは初耳だったのか、目を大きく見開いた。

「そうだったのか？」

「と言っても私は記憶にありませんけど。生活苦に、生まればかりの私を連れて両親はここから逃げ出したのだそうです」

ゲッティンゲンは、30年戦争の最中に何度も戦乱に巻き込まれた。時には攻撃を受け、時には略奪の憂き目にもあっている。

それらを避けるためには、今度は多額の軍税を支払わなくてはいいけない。10年ほど前に支配者がヴェルフ家に代わったが、それでも市民の負担はあまり変わっていない。

そんな生活に耐えられず、街を離れるものは多かった。エリゼの亡き両親も、その中の一人だったのである。

「だから嬉しいんです。私にとってはランドシュテーヘンも、ゲッティンゲンも故郷です。その故郷を助ける手伝いができる」

処女を失うことになるのは悲しいが、自分が二つの故郷を救える

のだと思うと誇らしい気にもなる。身分も持たないただのちっぽけな少女だが、自分の存在には価値があるのだ。

「エリゼ……」

「さあ、兄様。わたくしそろそろ行きます」

毅然と顔を上げ、エリゼは立ち上がった。彼女に残された仕事は、たった一つだ。

寝台の上でしばらくぼうっと窓の外を眺めていると、部屋のドアがゆっくりと開く音が聞こえた。

彼女の夫であるエルンストが入ってきたのだと、振り向く前に気付いた。ゆつたりとした足音が、やけに耳につく。

「待たせたか？」

彼が穏やかな声で問うたので、エリゼは首を振った。リーゼルの口真似は得意だが、彼女自身は貴族の令嬢でも何でもないのだ。あまり口を開いてボロが出て困る。

「何をしていた？」

「……星を、見ていました」

彼が隣に腰掛ける。華奢に見えた彼だったが、座った拍子にマツトが揺れ、彼女の体がわずかに浮き上がった。

細く見えても、やはり男なのだと、彼女が強く意識した瞬間だった。覚悟を決めたとはいえ、怖いものは怖い。

「星が好きか？」

「・・・はい。特に冬は、空気が澄んでいるのか一層輝いて見えて」

「そうだな、私も星は好きだ。・・・怖いか？」

急に話を変えられて、エリゼは反射的に「はい」と答えてしまった。

「あ！ち、違います。わ、わたくしはあなたの花嫁。な、何も恐がることなど・・・」

「別によい。私だって、怖い」

驚いて顔を上げると、信じられないほど優しげな茶色の瞳にぶつかった。

「え？」

「私だって怖い。この結婚に多くの想いがかけられている。あなたを守るという自信もない」

そう言って、うつすらと微笑む彼は相変わらず優しかったが、同

時に儂げだった。

「私は4男だ。公位を継ぐことはまずないだろうし、期待もされていない。……この街が今どんな状態かは知っているか？」

こくと頷いた。頷いた後、リーゼルは知らないかもしれないと思ひ至り、後で詳しく教えておかなければとエリゼはふと思った。

「兄も悩んでいる。以前ほど酷くはないが、この街はどんどん衰退している。人々は街を離れて行くし」

「それは、当然でしょう」

思った以上に冷たい声が出て、エリゼは慌てて口を覆った。が、傍にいたエルンストは当然聞き逃さず、顔を向けた。

慌てて言い繕うことも考えたが、それもわざとらしいとエリゼは覚悟を決めた。

「何？」

「……ですから、人々が街を離れるのは当然です。皆生活があり、家族がいるのですから」

「確かに今までは野蛮なカトリック軍やスウェーデン軍に何度も占領されてきた。だが、今は違う。今はカレンベルク領地の一つだ」

「支配者が交代したところで、負担は変わりません」

「兄があいつらと同じだと？」

「何が違うのですか？」

言いながら、段々とまずい方向へ行っていると気付いてはいた。そもそも、自分はこんなところでこの人と政治論、いや、そんな高尚なものではない、ただの口喧嘩をしている場合ではない。

何が悲しくて今から自分を抱く男とこんなことで言い合っているのだろう。しかも、相手は妻とはいえ、何も知らぬ小娘の理屈など歯牙にもかけないだろう。

「・・・たしかに、あなたの言うことにも一理ある」

気まずい沈黙を破ったのは、しばらく黙りこくっていたエルンストの方だった。

エリゼの方は驚いていた。まさか、彼が認めるとは思ってもいなかったのだ。大体にして、自分の言い分が感情論であることもわかっている。

自分の場合、死んだ両親が責められているような気がしたから反論したにすぎないのだ。

「しかし、兄はこの街を何とか復興させたいと思っているのも確かなのだ。私もそれを支えて行きたい。ただ私腹を肥やしたいだけじゃない。私たちにはこの地を守る責任がある。だが・・・確かに市民からしてみたら、私たちもスウェーデン軍も大きくは変わらないのだろう」

そう言って、彼は顔を上げ、エリゼに微笑みかけた。最初に会ったときと同じような、労わりのこもった瞳だった。

「よかった。こうしてあなたがきちんと意見を言ってくれる人で

あなたとなら、うまくやっていけそうだ、リーゼル」

「・・・そうですね」

彼が「リーゼル」を気に入ってくれたのはよかったが、自分はエリゼなのだ。今夜一夜を共にした後、自分はゲッティンゲンからも離れるというのに。

「私は考えたのだが」

しかし、彼の方はまだ話足りないことがあるらしい。これ以上ほろを出さないうちに早いところ事に及んで欲しくなってきた。

「はい？」

「私たちに期待されているのは子をなすことではない。お互いの家を持つ力を貸し合うことだ」

利用し合うとも言う。物は言いようだ、エリゼはこっさり思った。

「はい」

「だから、焦ることはないと思う。私は、あなたともっと話をし、互いを知る必要があると思う。あなたもさっきまで震えていたし、今日は無理強いはいしない」

「は？」

できれば無理強いしてでも早く終えて欲しいとは言えないエリゼ

は、彼の提案に目を剥いた。

「こういうことは、お互いを思い合えるようになれば、自然となるようになるものだと思うのだ」

言っていることは立派だが、要するに会ったばかりの女を抱く気はないということか。

自分の主人であるリーゼル姫とは、基本的に気が合わないんじゃないかと、エリゼはつい場違いな心配をしてしまった。

「だから今夜は安心してゆっくりと休むといい。旅の疲れもあるだろう。・・・また明日もこうして思ったことを遠慮なく話してくれると嬉しい。あなたとは気が合うと思う。・・・おやすみ」

そう言って、彼はエリゼの手を引きよせ、手の甲に軽くキスをすると、彼女に毛布を引きよせてくれた。

「・・・おやすみなさいませ、エルンスト様」

仕方なしに、エリゼも布団を被る。上質のシーツに包まれた寝台に横たわると、駄目だと思いつつも瞼が重くなり、気がつくときエリゼは熟睡していた。

夜中に一度だけ、目を開けたエルンストは、律義にヴェールをかけたまま、だがぐっすり眠るエリゼに微笑み、再び目を閉じた。

その間、まんじりとすることもできなかったユリウスと、その傍で安らかな寝息を立てているリーゼルは、そのまま朝が来るまで隣

の部屋で待機するはめになっていた。

翌朝、事の次第を聞いたユリウスは顔を青ざめさせ、一番信頼を置いている宰相ハインリヒに、伝書鳩を飛ばした。

ハインリヒがヴィルフリートとシユネを連れてゲッティンゲンを訪れたのは、その次の日のことである。

## 2 (前書き)

そういえば、ジャンルをホラーにしました。

ゲッティンゲンの屋敷には、既にランドシュテールヘンの公爵家で働いていたアガタという少女がいた。

彼女は、リーゼルに扮したエリゼと今もこの屋敷に滞在しているユリウスの連絡係となっている。

いかに兄妹といえど、結婚した（ことになっている）娘と一緒にいて、あらぬ不信を買っても困る。

ユリウスがこの屋敷に滞在しているのは、名目上はこの地の領主であり、エルンストの兄であるゲオルクに挨拶するためであるが、本当のところ、エリゼとリーゼルをこのまま置いていけないからである。

公爵の子息という身の上で何日もランドシュテールヘンを離れていられるのも、彼が三男であるからだ。その点において、エルンストと似た立場であるユリウスは、意外なほど妹の夫と話が合った。

「これはハインリヒ様」

ハインリヒがヴィルフリートとシュネを連れてやってくると、出迎えてくれたのはアガタだった。

「……エリゼは？」

「がちょうの番をなさって……いや、しております」

エリゼと入れ替わったりリーゼルは、侍女の役目には廻らなかつた。これは、彼女の仕草や話し方が、ただの侍女とは大きく違っていたからである。

何より、ここゲッティンゲンで暮らすわけではないとはいえ、後にエルンストの花嫁としてお披露目する彼女の顔を、誰かに見られても困る。

そのため、エリゼはエルンストに連れてきた彼女に違う役割を頼んでいた。

「あの娘は人見知りが激しいので、できれば誰とも接しない仕事をお与えください」

それでリーゼルに回ってきたのは、がちよう番である。普段あまり動物と接したことがない彼女だったが、リーゼルはこの役目を思いの他気に入っていた。

「しかし困ったな。明日には確かゲオルク様が来られると言うし、さすがに顔を隠したままでは都合が悪いだろう」

幸い、エルンストはゲオルクが来る前に片づけておかない執務がたくさんあるらしく、夜にならないとエリゼと顔を合わせない。合わせてもヴェールはとっていないので、未だ彼は花嫁の顔を知らないのだ。

しかし、肝心な既成事実ができていない。話すだけだ。意外にエルンストは話好きなのか、エリゼとあれこれと会話を持とうとしている。

妻と接する時間をもってくれるのはいいが、それより先に早いところ事に及んで欲しい。

「となると、決行は今日だな」

ハインリヒはそれだけ言うと、シュネに向き合った。

「では、早速頼む」

頷いたシュネを横目で見たヴィルフリートは、何のことだところり首をひねった。

「ああ、シュネには先に話していたんだが、強烈な媚薬を頼んだんだ」

「いたいけな子供に何てもの頼むんですか、あんたは」

つい「あんた」呼ばわりしてしまったが、保護者としては聞き捨てならない。それでなくともこんな話にシュネを巻き込みたくないというのに。

何がむさ苦しいから連れてきた、だ。この男、最初からこれが目的だったに違いない。

「大体、お前は媚薬とは何なのか知っているのか」

「男の方を元気にする薬と聞いております」

「・・・」

それ以上突っ込んで訊くのは憚られる返答だ、間違っではないが。

微妙に勘違いしたままでいるのか、わかっていて、あえて濁して表現しているのか判断に困るところである。

「必要なものはあるか？何かいるものは？」

「いえ、既に用意しております。台所を貸していただければ」

アガタが会話のないように訝しげにしながらも、シユネを台所まで案内するために前に出た。

「さて、これで上手くいくといいが」

ハインリヒは館を見上げ、深くため息をついた。

・・・

「実は、私の愚息がイタリアに留学しております。それが珍しいチョコラーテという飲み物を送ってきたのですがこれが実に美味でしてな。ぜひともゲオルク様とエルンスト様にもご賞味頂こうとお持ちいたしました」

にこやかな笑みを浮かべたまま、ハインリヒは目の前のエルンス

トに跪いた。

「その名前は聞いたことがあります。それにしても、宰相自らお持ちくださるとは」

エルンストの方も穏やかな笑みを浮かべながら、丁寧に対応する。身分としてはエルンストの方が上だが、ハインリヒはランドシュテールヘンの宰相であり、国を盛りたててきた。ランドシュテールヘンが小国でありながら他国からの侵略をかわしてきたのは、彼の手腕によるものが大きい。

公爵以上に油断ならない相手として、エルンストの方も丁寧に、かつ隙を見せないよう細心の注意を払っているのだ。

「生憎兄がここに来るのは明日です。なので、今日はこの館に泊まられるといい。うちの料理人はガチョウ料理が得意ですから、ぜひとも召し上がっていただきたい」

「それは楽しみですな」

笑みを崩すことなく、ハインリヒは顔を上げた。

「ああ、酷い目にあった」

リーゼル姫の寝室のすぐそばに、控室がある。そこにはリーゼル直属の侍女が誰か一人は待機して、女主人が用を言いつければすぐに対応できるようになっている。今日はアガター一人がいるようにしていた。

その部屋にいたシユネとヴィルフリートの前に、げっそりした面持ちのハインリヒが入ってきた。手には、夜食と思しき軽食が載せられた皿を持っている。

「どうなさったのですか」

先程煎じておいたヴァレリアンの根と、乾燥させたパッションフラワーの花弁をポットに入れたシユネは、怪訝な顔で彼を見やった。

「・・・ガチヨウだよ。俺、昔からガチヨウは苦手なんだ。というか、鳥肉はあまり好きじゃないのに、でかいのが丸ごと一羽出てきた時は何の嫌がらせかと」

「警沢なことを言って」

塩漬け肉とスープとパンで夕食を済ませたヴィルフリートたちからして見れば、喧嘩を売っているのかと問いたくなる。

「そう言うな。夜食に出されたこれ、お前たちにやるから」

ハインリヒがこっそり持ってきたのは、薄く切ったライ麦パンだった。その上には、今日夕食用に焼いたガチヨウの肉の切れ端が、ソースと共に載っている。

夕食が物足りなかった二人は、ありがたくご相伴にあずかること

にした。

「それが？」

もぐもぐと夜食を食べている二人を見ていたハイインリヒが、ふとテーブルの上に置いてあるティーポットを指さした。

「ええ。ご注文の媚薬です。とはいえクローイターティー薬草茶ですから、エルンスト様の健康を害する恐れはありません。蜂蜜を入れたので、普通にお飲み物として飲んでくださるか？」

「それは重畳」

「そしてこちらはジャスミンの精油です。同じく媚薬効果があります」

そうやって、シユネは沸かした湯をティーカップに注ぎ、その中にジャスミンの精油を数滴落とした。途端に甘い香りが部屋中に広がる。

「枕にはバラの花びらを詰めておきました」

寝所の支度を済ませたアガタの手には、無数の小さな切り傷がある。今日は一日バラ摘みをしていたらしい。

お膳立ては完了である。

「そういえば、シユネ。この屋敷ではあまりフードをとらないよ  
うにね」

夜食を食べ終えたシユネに、アガタがこっそり耳打ちした。

「エルンスト様の従兄のキュルド様は女にだらしない方みただから、あなたの顔を見たらよからぬことをするかもしれないわ」

「……気をつけます」

「その従妹とエルンスト様が逆だったら話は簡単だったんだがね  
こっそり聞いていたハインリヒがしみじみと呟いた。

「でも、それだとリーゼル姫様には気の毒な話でしょう。結婚する相手が浮気者だなんて」

「何を言っている」

小馬鹿にしたような笑みを浮かべたランドシユテーヘンの宰相は、冷たい声で続けた。

「それが貴族の義務だ。いい服を着て、食べ物に困らない暮らしを許されているのは、こういう義務があるからだろう」

珍しいこともあると、食後のお茶を啜りながらシユネは思った。  
飄々としたこの名宰相でも、熱くなることがあるらしい。

「相手が浮気性だと気の毒？忘れるな、ヴィルフリート。今一番  
気の毒は、あの侍女だったことをな」

.....

エリゼは、自分の役割をきちんと理解していた。

にもかかわらず、なぜ今自分はこの男とこつも議論しているのだろつ。しかも、バラの香りやジャスミンの香り漂つこの官能的な寢台で。

事の起こりは、ここゲツティンゲンの復興のためには何を生産させるべきかというものだった。経済の面で、ここ数年ゲツティンゲンは衰退の一途をたどつていた。

今までこの街は毛織物が盛んだったが、最近はいギリスの安価で質の良い毛織物の台頭により、どんどん人気があつていった。

議論は白熱してきた。おかげで、ハインリヒが連れてきた薬剤師という、フードを被つた小柄な人物があつた媚薬らしき茶も、手をつけないまますつかり冷え切つてしまつてゐる。

「何か、ここでしか手に入らないよつな物珍しいものができればいいのだが」

「新しいものを作るにしても、容易ではありません。それが作物だろつと、手工業であるろつと、一から学ばなくてはなりませんから」

「学ば、か……。愚直な市民や農民にできるだろつか」

不遜な言い方に思わずむっとしたエリゼだったが、考えてみればエルンストの発言は、全く悪気がないのだろう。

なぜなら、彼は基本的に性格は悪くない。いや、むしろかなりいい。エリゼにも優しい上に、侍女となったアガタに対する態度も女性というのもあって丁寧だ。

自分たちだって、陰では「貴族ってのはみんな鼻もちならない」と決めつけ陰口を叩いている。それと同じようなものなのだろう。

だが、そういった言葉がエルンストの口から飛び出てくるのは、なぜだか心が痛かった。

「市民や農民が愚直なのは、学ぶ場所がないからです。貴族と同じように学ぶ機会があれば、彼らだってしっかりと物を考えます。・  
・彼らと貴族に、何の違いがありませんよう」

驚いて目を見開くエルンストに、エリゼは慌てて顔を背けた。今の発言は貴族らしからぬものだった。

「随分思いきったことを言う」

しかし、彼はエリゼの発言を、呆れながらもどこか好ましいものとして見ていた。彼女の考えは嫌いじゃない。

この激動の時代、高貴な身分といえど力がなければ即座に引きずり降ろされる。自らに流れる血が気高いのだと口に出せど、無能であれば命すら絶たれる。

そうだった光景を見ていた彼からすれば、妻の言葉に説得力を感じるのであった。

「……そろそろ顔を見せてはくれないか」

「駄目です」

「なぜだ」

「まだ、きちんとあなたの妻になっておりません」

即座に返すと、エルンストは笑いを堪えるように唇を歪めた。

「妙な女だ。あれほどに柔軟な発想を出す癖に、変なところで頑固だ」

尚も笑いながら、彼はゆっくりと、エリゼの編み込まれた金色の髪に手を伸ばした。リーゼルと同じ色の髪である。

だが、こつも彼と話しては、いざリーゼルと入れ替わったらばれてしまうのではないかと、エリゼは今更ながら慄いた。

入れ替わったら、リーゼルにはしばらく病気が何かの理由で誰とも話せなくなったということにさせるべきか。

それにしても、なぜ自分はこんな場所でこんなことをしているのだろう。

「もう震えていないんだな」

ぼんやり考え事をしていたエリゼは、エルンストの呟いた言葉の意味になかなか気付かなかった。

「え？」

「だから、もう怯えていないんだな。私が触れても」

そりゃ怯えるも何も、初日から割と従順とは言えない態度をしていれば、怯える要素などとうの昔に忘れてしまった。これが妻の本性を出させるための策略なら、成功したと言わざるを得ない。

まさか、そのために未だ手を出さないのでは

そこで、エリゼの思考は唐突に途切れた。エルンストが、そつと彼女の体を抱きしめたために。

「エ、エルンスト様？」

「やっぱりまだ怖いか？少し震えている」

「・・・これは武者震いです」

生真面目に答えたら、今度こそ彼が噴き出した。肩を揺らして笑っているのが、密着した体を通じて伝わってくる。

「笑いすぎです」

「くくっ・・・すまない。それにしても、武者震いとは、私の妻は勇ましいな」

反論する前に、唇が塞がれた。彼の唇が触れるのと同時に、寝台の蠟燭の灯りが静かに消えるのを視界の端に捕えながら、リーゼルはゆっくりと目を閉じ、夫の背に腕を回した。

ヴェールはいつの間にか、寝台からすり抜け、床に落ちている。

.....

リーゼルは、この屋敷に来てからというもの、充実した日々を過ごしていた。

アガタも最初の頃はあれこれ世話をしていたのだが、最近では割と放っておいている。リーゼルにこの暮らしは向いていたのか、不思議なほど彼女は生き生きしていた。

どれもこれもが新鮮だった。

がちょうだけでなく、鶏や豚、馬、番犬。生き物たちの息遣いを間近で感じ、彼女は今まで感じたこともない、リアルな感動を覚えていた。

それらに触れながら、懸命に働けば、気がつけば陽が落ち一日が終わる。心地よい疲労とえも言えぬ充実感に、リーゼルの小さな胸は高鳴り、彼女は自分が今、確かに生きているのだと強く実感した。

淑女としての勉強も、作法も、ただただわすらわしいものとしていた彼女だったが、こういう暮らしは向いていたらしい。

逆にエリゼの方は昼間はずっとこもって本を読んでいたりと、それはここ最近の歴史書であったり、政治に関する物だったり、幅広い。

しかし、そんな生活もじきに終わりだ。リーゼルはエルンストの妻としてここに残り、エリゼはランドシュテーヘンに帰るのだ。

厠のために目を覚ましたリーゼルは、外に出た。今日は冷え込む。吐く息は白く、夜空は月と星で美しく彩られている。

見事な星空だった。

ふと、故郷にいるであろう男の顔を思い出す。彼もまた、今頃この見事な星空を見ているのではないか。

ファラダという名の馬番は、彼女にとって初恋の相手だった。

本当言つと、輿入れの前に想いを告げるだけでよかったのだ。彼は、きつと驚き、そして微笑んでくれるだろう。それが見られたら満足だったのに。

それなのに、彼は彼女の唇を奪い、烈しく抱きよせて来た。抵抗しなかったのは、彼の体があまりにも熱かったからだ。あまりにも強く、切実に、彼女の名を呼んだからだ。

覚えているのは熱と痛みだけだった。全てが現実感のないまま行われ、気がつけば朝だった。

おそらく、自分はそれほど彼を好きだったわけではない。憧れの領域を出ていなかった。それなのに、今ではこんなにも胸が痛い。あの時の吐息すら、生々しく甦っては、身体が熱くなる。

「ファラダ」

思わず呟くと、その声に反応したように、物陰から誰かが出てきた。

「・・・何だ、がちよう番の娘じゃないか」

そこにいたのは、エルンストの従兄のキュルドだった。赤ら顔で出てきたその男は、足取りもおぼつかない。おそろくかなり酔っているのだろう。ふらつきながらも、彼は不遜な態度のまま、リーゼルに近づいた。

「ふうん」

濁った眼で無遠慮に見られ、思わずむっとすると、彼は唐突に彼女の髪を引っ張った。

「痛い！何するの！」

「・・・なんて口の利き方だ。お前は自分が誰に物を言っているのかわかっていないのか？」

いわれて、慌てて自分の立場を思い出した。公爵家にいる間は、父や母、兄たちを除けばリーゼルがどれだけわがママを言おうと、せいぜいが教育係が小言を言うだけで済んだ。

罰を与えられることなどあるわけがない。誰も、そんな権利を持つていないのだから。

しかし、今は違う。彼は、その気になれば彼女をいかようにもできる。なぜなら、今のリーゼルはただのがちよう番に過ぎないのだから。

「まあいい。女は多少生意気な方が面白い。それにしても見事な金髪だな」

「お、お離してください」

震える声で言うも、彼の耳には届いていなかったのか、彼はさらに身体を近づけた。

酒臭い息がリーゼルを襲う。彼の瞳に宿るのは、まぎれもない情欲だった。酒によってもてあました衝動を、たまたま見つけた手頃な侍女で解消しようとしている。

ただ、少しばかりいい家に生まれただけの、つまらない男が。

リーゼルは酷く抵抗した。

恐怖よりも、怒りの方が勝った。公爵令嬢として生きてきた彼女の矜持が、この現状を許さない。彼女も知らなかった強い誇りが、彼女に勇気と力を与えた。

だがそれは、一つの悲劇を生むことになった。

その晩、ヴェルフ家の館で、一つの命が潰えた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6186y/>

---

白雪娘

2011年12月7日08時54分発行